

利根川圖志

二





32824

510

利根川圖志卷二

下總 布川 赤松宗旦 義知

利根川上中連合



利根川の全流凡七十餘里その大小不因てこれを上中下の三不
 分つ即本源上野國利根郡藤原の奥より二十八里餘を経て渡良
 瀬川落合の處不至るこれまでを上利根川といふかくて武藏國
 葛飾郡栗橋御關所の前不至て官渡あり房川渡といふ川幅凡三
 里不以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ島川の東不權
 准ず此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并
 名起る此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并
 せ江戸川とあり下總國葛飾郡堀江新田不至て海不入る北を赤
 堀川といふ長一里半許廣六十間より二百三十間不至る再分れ
 て逆川と爲り平時ハ南して江戸川不落つ洪水の時ハ關宿の抗
 行して中利根川不落つ故不逆川の名ありこの三川の間二島を爲す合せて五ヶ村島と

三 利根川上中連合

いふ佐伯川これを分つこの島始ハ五村あり一赤堀川の下即中
利根川凡十六里餘を經養養川落合の下不至て下利根川と爲る
古昔利根川の流ハ今の處からて尚南方に在りき今これを古利
根川といふ今の利根川上中連合の邊ハ古の下河邊庄櫻井郷か
り古河より關宿邊までをいふ五ヶ村島の内江川中古鎌倉より奥
新田古名櫻井新田といへるもこの故あり
州不行くむとてこの邊を過ぎ事疑ふ上古の奥州道ハ木曾
か、り花輪澤入古峯原峠を越え終ふ高原峠を經て奥州會津不
入り、りありむと下野鹿沼ある山口安良が押原推移録中巻ふい
へるハさる事にてこの許多の人の經過せし中不遺物の有るハ
道とハ固より異あり
中田光了寺不藏せる静女舞衣あり前林を經て伊坂不率せし
起る由静女舞衣縁成氏朝臣の古河城不住一篠田氏の關宿不在り
一頃ハ士民羣集の街あるべし道興准后の村君武州埼玉郡に上
村有阿佐間の同郡を經て古川中田郡山不來り多ひ更に鎌倉より
鳥喰を過ぎて佐野舟橋の方に行き多へるハ文明十八年の秋か

りこの地後ハ北條家不屬せしが天正十八年小田原落城の後
東照神君不歸一元和止戈の後この處官渡と爲れり當時下野以
北不行くに必由の要路あり

利根川在下總國俗說飲此水者令人 羅山先生

夷齊設使飲貪泉 義氣清風不可遷

唯有古今天性在 癡人猶守利根川

日光山紀行この題題咏

總説こ、不盡く以下各地を記す

鳥喰 下總葛飾郡古河領の内鳥喰村あり日光山の道筋の少

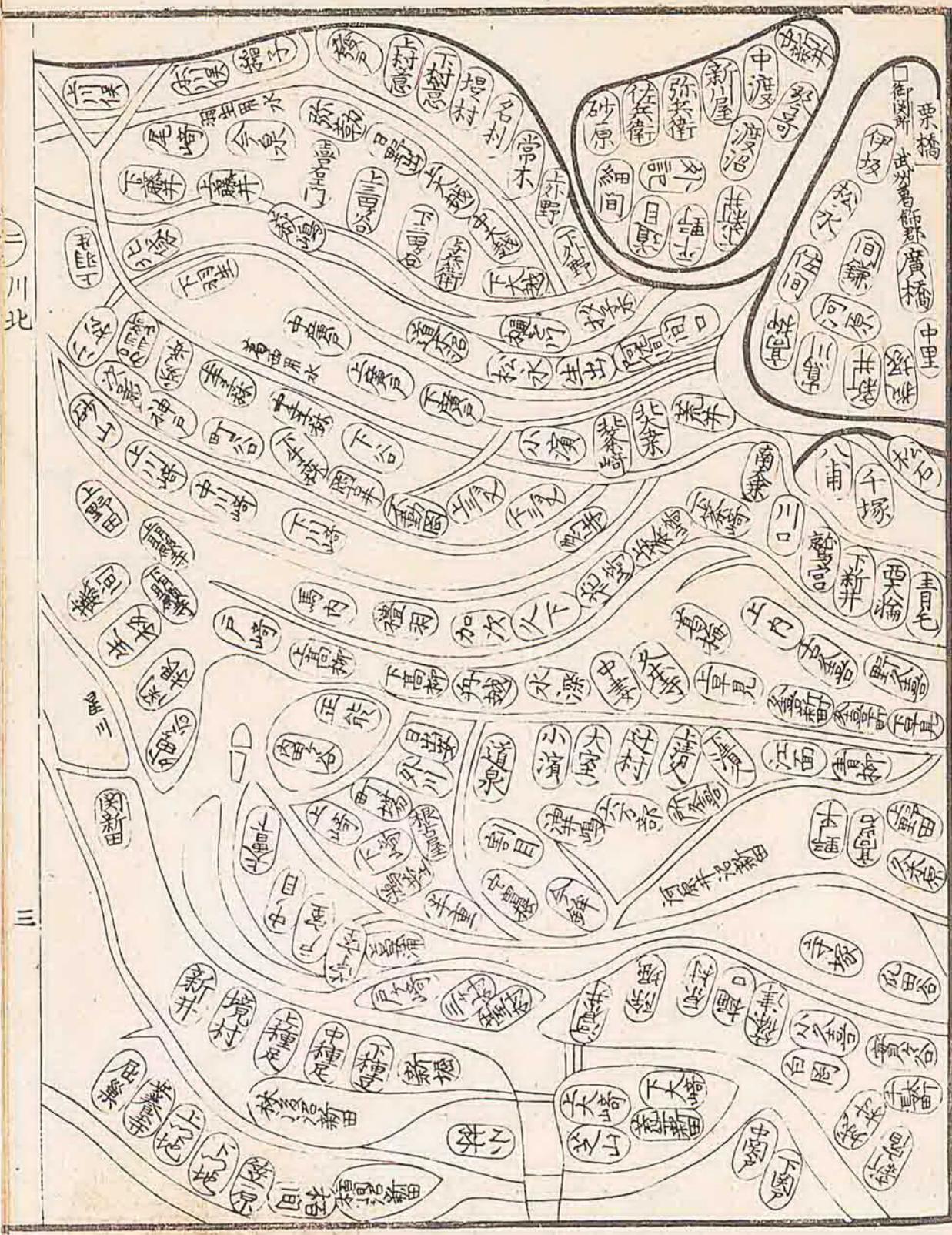
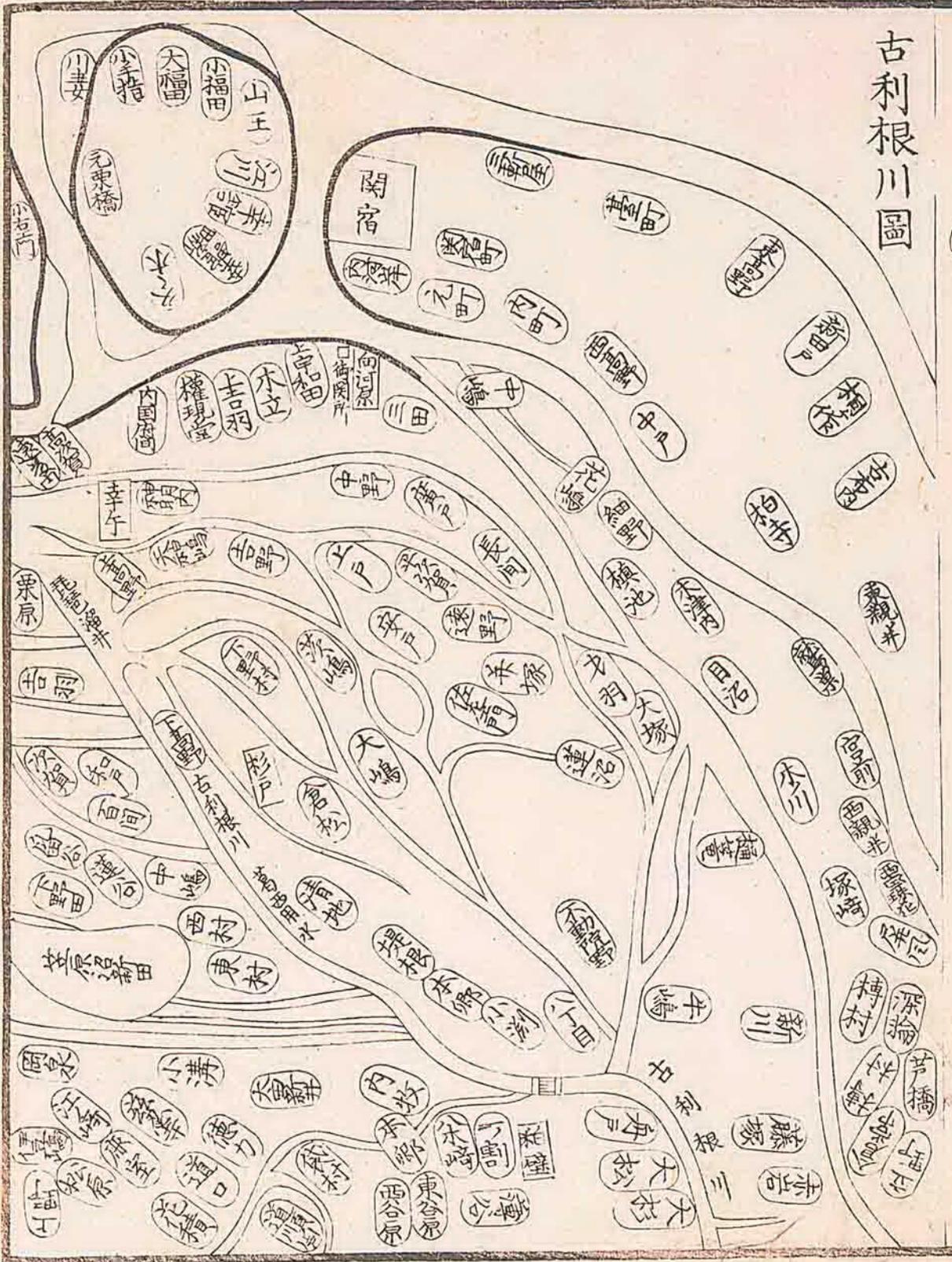
西不て古海道といふ以上廻國雜記標注上卷 渡良瀬川東岸の地あり廻國

雜記云鳥ハミといへる所を過行きたる不日暮れ信りればハ

さそられて我もやどり不いそぐありうへるゆふの鳥喰の里 道興准后

茶屋新田 常總軍記卷一云下總古河と中田の間不茶屋村とい

古利根川圖



二 三 北

三

ふ處ありこの所ハ 將軍家日光 御社參ふも二町許の内
御駕籠不召させられず 御歩行の恒例かり昔古河公方の時
ふ御茶屋の跡ゆるふ茶屋村と号す

中田 江戸より日光山并奥羽の官道あり藤知文東山志上卷云

中田 古河まで一里十八町 土井彦封内寺社八幡社 香取社
驛程見聞雜記と卷云中田宿の入口東の方に八幡香取兩社合
殿あり往來の鳥居より一町餘も入れバ社あり神さびていと
尊し昔ハ川の北不在り一町餘も入れバ社あり神さびていと
替りて今ハ爰不移すとあり 瀨 時宗 本願寺 萬福寺 淨土眞宗
淨土眞宗 岩松山聖徳院光了寺 下按に此處ふてまめ藥を賣る効あり
廻國雜記云中田といへる所ふて始めて富士を眺めて

このはのみちとおふぬ道のをいきてみやこのふかむむ 道興准后

静女舞衣 中田宿光了寺藏かりこの寺原栗橋の南なる高柳村
不在りて高柳寺といへる頃静女を葬りてより什物とい爲り
はるう閑窻瑣談卷一云武藏國栗橋宿より西方ふ入る事四五

町高柳村の内松永といふ處ふ杉あり昔よりしてこの杉を静
の塚と言傳ふ近頃中川君の立てさせむひ一碑あり静女塚と

記す云この説由ありてきこゆ 日光驛程見聞雜記上卷栗橋條

内室治戸といふ所ふ静の墓印の杉の太本あり静御前義經の
迹を逐ひ此所ふ來り奥の高館ふて戦死すと聞て俄ふ病で死
六丈七尺張り十五間圍二丈三尺今年五月關東の郡代中川飛驒
守賢を捐てその事を石に勒して樹下ふ立つとあり以上ハ
享和三年の事とぞかく二處ふ同人の墓あるハ一ハその侍女
琴柱の墓あるこの寺古ハ天台宗かり一が今ハ淨土眞宗ふて
報恩寺末あり改宗の事静女舞衣縁起ふ建保年中宗祖親鸞上
浄土眞宗光了寺と改号せり西願ハ後鳥羽院の北面土岐又太
郎國村の次男出家して權大僧都法印圓崇といふとハへり
この舞衣の事縁起云後鳥羽院の御宇一歳大旱魃して耕草連
枝も枯果國民の愁安かりず貴僧を請ド兩乞執行まませと
と一滴の潤さ一公卿詮義の上一百人の舞姫を集め神泉苑の
池ふて法樂の舞を舞ハせむふ九十九人まで舞ハれれと

その驗あやまふ一百人目あ静しず既い不な舞まハむとせし時とき御ご棧せき鋪ふ御ご簾れんの内うち
より御ご衣いを下くださる乃すなは静しず頂ちやう戴たいしてこれこれを著あし舞まひとれれハ車しや軸ちやく
の如ごとく雨あめ降ふりり即すなはちこの舞ま衣いあり蛙あま蟻り龍りゆうの舞ま衣いといふ静しずの
事こと義ぎ經けい記き卷まき五ご静しず吉きち野の山さん捨すててりる、事こと條じょう云い一いつ歳さい都と不ふ百ひやく日じつの
早はやの有ありここ三さん院いんの御ご幸しやくありて百ひやく人にんの自みづか拍ぱく子しの中ちゆう不ふと静しずが舞ま
ひひ下くだされれここ三さん日じつの洪こう水すい流りゅうれれ此これれ八はち幡ばん宮みやうへ参ま詣ぎの事こと條じょう等とう及およ
び諸しよ書しよ不ふ見みええここ三さん日じつの洪こう水すい流りゅうれれ此これれ八はち幡ばん宮みやうへ参ま詣ぎの事こと條じょう等とう及およ
ハその時ときの祿ろくよよて文ぶんはは螭し龍りゆうかどつきつきいいふるべべ衣い然しかれれハ義ぎ經けい
公こう頼らい朝ちよう公こうの御ご勤きん氣きを蒙まうり落お人にんとありり多たふ静しずハ義ぎ經けい公こうのおと
ひ人ひとかれれハ鎌かま倉くらへ召めいされれ義ぎ經けいの御ご行ぎやう方はう問もんハせままませせとと
知ちりりささるる故ゆゑ御ご暇げま下くだささるる静しず思しふふ極ごく義ぎ經けい公こう吾われ妻さい不ふ忍しのび居ゐるるハむ
幸しやくに是こゝままて下くだりり空くうく都と歸かへりりむ事こと無む念ねんあり御ご行ぎやう方はう尋ぎんねねむと
按あに静しずが鎌かま倉くら不ふ下くだりりハ文ぶん治ち二に年ねん三さん月げつ一いつ日にち一いつて義ぎ經けい朝ちよう臣しん
高たか館くわん自みづか盡じんハ同どう五ご年ねん閏にち四し月げつ卅じやう日にちありりされれハ静しずの奥おく州しゆう下くだりりここ
時ときの事ことハ非ひず義ぎ經けい記き本ほん文ぶんハてんてんりりううじじの籠かご不ふ尼にと為なり
行ぎやうひひすすまましてして廿にじふ歳さいよよててううせせるる由よしハへど松しょう風ふう庵あんの評へい判はんハハ
義ぎ經けい奥おく州しゆうよよてて自みづか害がいの由よしを聞きて静しず尼に不ふありりて名なをささいいハハヤヤハ
とつきつきて暫しばらく嗟あはれれの邊へた不ふ在ありりハ後ご南なん都と不ふ住ぢゆうミミととありり又また奥おく

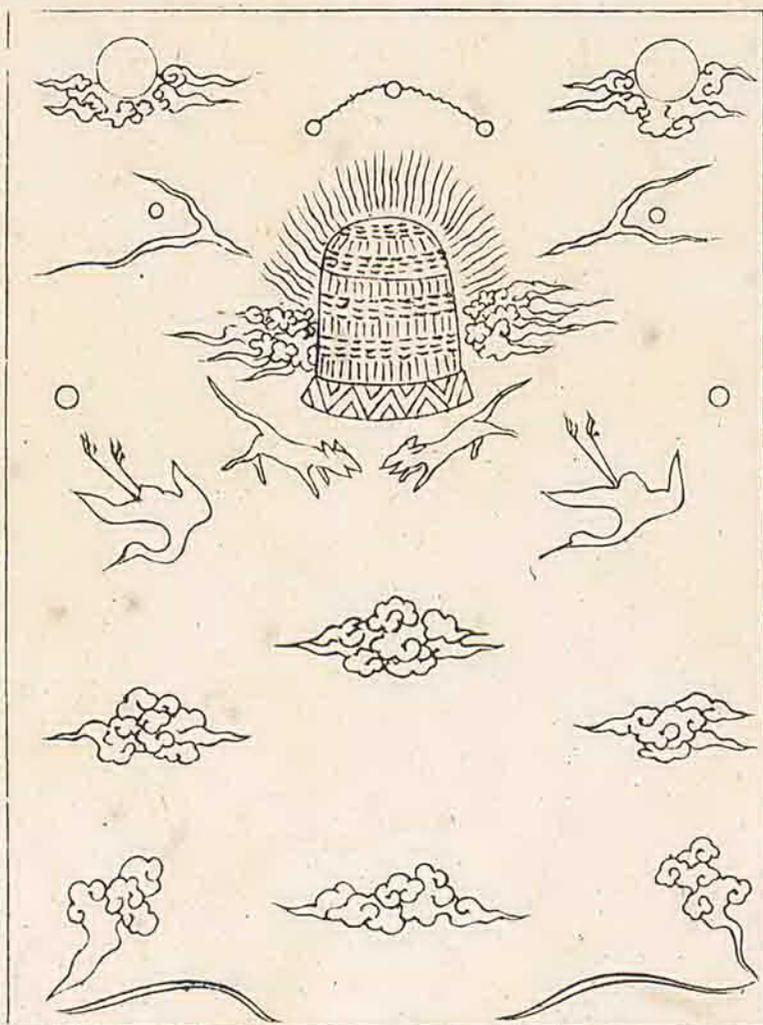
州しゆうの方はうへ下くだりりハハいいへりりと侍ざむらひ女によ琴こと柱はしらを召めい連れん當たう國こく下くだ邊へ見みと
ああれれババささるる説せつも有ありりハハかりりと侍ざむらひ女によ琴こと柱はしらを召めい連れん當たう國こく下くだ邊へ見みと
いいハハ里りままて下くだりり多たふ然しかるる不ふ往やう來らいの人ひと々々ハ義ぎ經けい公こうの御ご尊そん
申まをししハハりり静しず御ごああつつかかく思しひ御ご行ぎやう方はう尋ぎんねねハハこれこれババさされれハハ義ぎ經けい
公こうハハささるる頃ころ高たか館くわん不ふて空くうくありり多たふと語ごもああへへず静しず泪なみだ不ふ袖そでを
沾うるしし實じつ不ふ頼らい少せうき世よの有あ極ごくせせひ陸りく奥おくままても尋ぎんねね行ぎやうりりむむと思しひ
一いつふ心こころを盡じんしし、甲か斐はいも無なく浮う世よふふかかめめハハ剃そ髮はつ衣えの身み
とかりりて義ぎ經けい公こうの未み來らい御ご菩ぼ提だいを弔たづなハハむむと橋はし即すなはち下くだ邊へ見みを踰こえ
て日にち光こう驛えき程ほど見み聞き雜ざつ記き上じやう卷まき茶ちや屋え新しん田でん條じょう不ふ是ぜより東とうの方はう十じゆう町ちやう餘りゆう
所ところ不ふ在ありりハハ南なんふ逸いつ見み村むらと大だい堤づつとハハ兩りやう村むらの間まハハ上じやう水すいありりそその
所ところ不ふ在ありりハハ南なんふ逸いつ見み村むらと大だい堤づつとハハ兩りやう村むらの間まハハ上じやう水すいありりそその
の所ところ不ふ在ありりハハ南なんふ逸いつ見み村むらと大だい堤づつとハハ兩りやう村むらの間まハハ上じやう水すいありりそその
ひひ傳でんふふとといいハハ奥おく州しゆうへ行ぎやうかかむむ止とどめめむむヤヤハハ思し案あんせせハハ所ところありりハハ
弘こう法ぽうの加か持ぢ木もありりハハ中ちゆう畧りやく自みづか分ぶん手て元げんの柳りゆうを引ひ結むすび迷まひひ道みちの印いんと為なるる
ふ里り不ふかか、りり中ちゆう畧りやく自みづか分ぶん手て元げんの柳りゆうを引ひ結むすび迷まひひ道みちの印いんと為なるる
一いつ都との方はうへ向むかひひけけるるふふここの所ところを静しず返かへといいふ當たう寺じ三さん十じゆう町ちやう東とう前ぜん林りん
といいふ所ところ不ふ在ありり結むす柳りゆうそれそれより西せいふ當たうりり伊い坂さかといいふ里り不ふかか、

静女舞衣圖

長二尺五寸

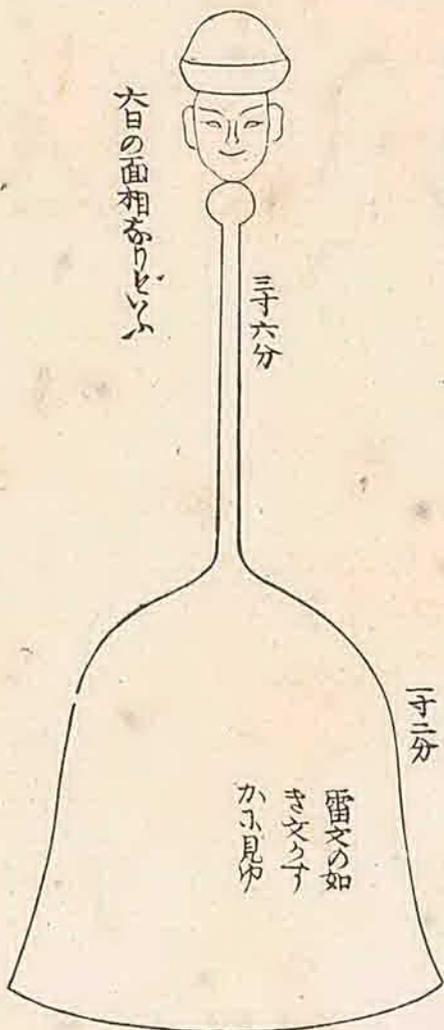
地黒く種々の糸にて文を繡せり

幅一尺五寸五分



弘法大師鈴圖

銅色甚古



一寸二分

底徑 一寸七分五厘

六百の面相ありといふ

三寸六分

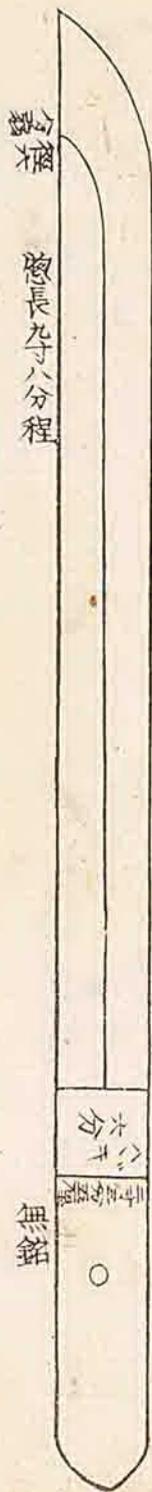
義經朝臣鐙



この太きすちの鐵
もてその餘ハ木か
り木地のまゝあり

静女懐劍

義經朝臣所賜



鐵

總長九寸八分程

り多ひいふいど、さえ秋ハ物うき習ふりけるふ旅の疲と均
 く思はずも定ふき世と諸共ふ野邊の露と消えぬふ琴柱泪と
 諸共ふ當寺ふ葬り一墓の印ふ一本の杉を植ゑおく今ふこれ
 を一本杉といふこの時守本尊并頂戴の舞衣義經公形見の懷
 劍當寺ふ納り常什物と爲り畢ぬ
聖德太子像 宗祖親鸞 聖人御作
鑑 義經公奥州御下向の時預けり
即永錢一貫文御用立ヒヤ傳ふ
十字名号 蓮坐御影 繪 御銘御贊 覺如上人御作 法眼淨賀筆
六字名号 蓮如上 阿弥陀如來 靜守本尊 師御作 慈覺大師御作
藥師如來 并十二神將 全御 開運不動明王 智證大師御作
大黒天 師弘法大 鈴 師弘法大 師所持
 白川御城主定信公舞衣高覽之上近臣内外函被爲奉納者也
 春日詠靜女舞衣和歌
源德純 新田氏
 やまのはふちまふ袖のまつらふぞたふひく雲も雨とやある

題妓靜舞圖

大窪行

嬌容 袅娜 太多情 柳弄 臂肢 風力輕
 一曲 霓裳 羽衣 舞 誰知 中有 鬪牆 聲

大櫻 日光驛程見聞雜記上卷中田條云宿より東の方一里足り
 ず大山といふ所ふ大光院といふ修験の寺あり寺内ふ圍三丈
 程の櫻の大木あり單辨ふて香ありといふ

熊澤蕃山墓 大堤鮭延寺ふ在り先生名ハ伯繼字ハ了介又了號

ハ蕃山又息遊軒といふ備前ふ事へて功績あり文學ハ人の知
 る所ありその行狀ハ門人巨勢直幹の實記草加定環の行狀菱
 川大觀の傳記ありといひて先哲像傳卷二ふ定環の行狀をあ
 げり文中先生の功績をあげりるハ正保乙酉備前侯依京極
 主膳再求以祿之于時先生歳二十七備前國政大革承應甲午備
 之前中二州大飢窘迫及九萬人國者不知計爲乃委事於先生先

生出命。施政。民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所。安遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。といへる。ふて知るべし。後故ありて。備前を辭し。明石に在て。松平日州侯不事へ。侯の移封。不古河。不從。ひ上表。不因て罪を。幕府に獲頼。政郭。不禁錮して終る。元禄四年辛未八月十七日。壽七十三。鮭延寺に葬り。儒禮を用てす。この寺ハ鮭延。越前の舊臣主の爲に建つる所あり。鮭延ハ出羽の地名。越前ハ最上義光の舊。臣事ハ常山記。談明良洪範等。不見え。さり。三島大明神社。水海村に在り。廻國雜記云。下總國と不りの山といへる。所ハ伊豆の三島を勸請し。奉りて大社ましく。にりかの別當の坊に暫逗留し。侍りたる内。不哥ふと度々いひす。てども少々書し。おき侍る。

たづね來てとふ。そまのおか。名をおもひ。ぞの。まほ神風。道興准后。標注云。下總葛飾郡郡山郷水海村に在り。三島大明神社領五石。

別當滿藏院古河よりハ東の方栗橋の北東に在る村あり。不接。后同時富士蟲初雁。葛菽の吟。諸國圭齊錄。下總國部新義真言のあり。この處の歌枕とす。べし。諸國圭齊錄。下總國部新義真言の。中ハ五石。三島別當。葛飾郡郡山郷水海村。滿藏院と見え。さり。この餘曹洞宗。不十。法華宗。不五石。葛飾郡水海村吉祥寺。二。石葛飾郡水海村正藏寺を載せ。さり。日光驛程見聞雜記上卷中。田條云。又一里東。不水海村あり。昔梁田家の領せし。所あり。その村の名主。鰐口を所持す。是ハ三島明神へ寄進せし。物あり。文龜三年八月日。梁田右京亮平宗助と鑄付。れて有り。同村に北條氏直が虎の印を居。ゑ。る。旋書を所持し。る。百姓あり。惣てこの邊。不梁田家臣下の子孫多し。この所。中田を。の名高き。繭の藥を賣る。齋藤源太左衛門と先祖ハ彼の家。の老あり。梁田ハ五十万石程領せし。大名。不て有り。たる。と。本注。按。不右京亮宗助ハ。康正の頃。古河の成氏。不屬し。上杉と。戦ひし。出羽守が子孫あるべし。梁田ハ關宿の城主あり。云。五村島。下總國葛飾郡に屬す。南ハ權現堂川。北ハ赤堀川。東ハ逆。

川の間ふ在り又佐伯川を以て川妻とその餘の十一村を分つ
これも古五村あり一が今かく分れ一あり古ハこの地下河邊
庄櫻井郷不屬すこの名の存せるハ櫻井新田村今江川新田と
いふこの島この島ふ小手指村あるを以て小手指差原の地とす
の内あり
る者ハ誤あり小手指差原の名ハ新葉集宗良親王歌の詞書ふも
義興義治の三將足利尊氏と戦ひ一ハ名高一新安手簡ふ小手指
差原ハ北野物部天神社より西北の方六七里四方の地をいふ
と見え武藏野地名考入間川條ふ小手指差原もこの邊ありとい
へり然るハ江野地名考所圖會卷十三小手指差原條ふ辨せる豊島郡
下練馬村ふその舊地ある由の土人の説と書言字考卷この島
一ふ小手指差原下總葛飾郡といへるハ同ト状の誤あり
小ありと雖古河城の舊址ドヨブノ砂山富士見渡等の勝景あ
り又有土の寺多一

諸國主齊録下總國部曹洞宗ふ二十石山王山村東昌寺十五石東栗橋
院五石同村寶泉院まゝ五石新義眞言本栗橋村寶藏院五石同村千手院五
石小手指村勝光院まゝ法華宗ふ十石葛飾郡本栗橋法定寺浄土宗ふ十石本栗橋隆岩

寺五石本村大泉寺この寺の後人江戸深川冬木町を壑てこゝに住
一今猶古河公方の文書を藏すといふ又關東古戦録ふ載
せざる里見の臣冬木丹波守ハこの同族ある尋ねべし
五石本山修験橋西光院と識せりこの處かく由緒ある寺院の
多うるハ古河公方の座せし因りてあり

幸館村ふ生月の塚あり下ふ載す生月といふハ信けがべし
川妻五村島の西隅あり佐伯川を以て東部と分つこの村の舊

家不築田河内守持助の感狀上杉輝虎及び直江兼續の書を藏
する者あり傳來未詳ふかならず又古き膳枕十具あり傳説最奇か
り共ふ下ふ載す

古河城舊址五村島元栗橋ふ屬すこの地權現堂川を掘り一よ
り城址も栗橋と二ふおれり今御關所ある栗橋ふ對へて此處
を元栗橋といひ川を夾て共ふ城山といふ本城この城榎曲輪七曲上
宿中町下宿古河町信濃町表町隆岩寺嘸雲山といふ浄土宗御朱印高十石寺號ハ

古河城舊址圖

惣名 城山

新橋小田門古

三河池

古河城跡

正膳官
谷
開

谷
開

七曲

加原田

古河城跡
古河跡あり
字在大島と

本城

松倉

左門

下宿

上宿

中町

隆吉寺

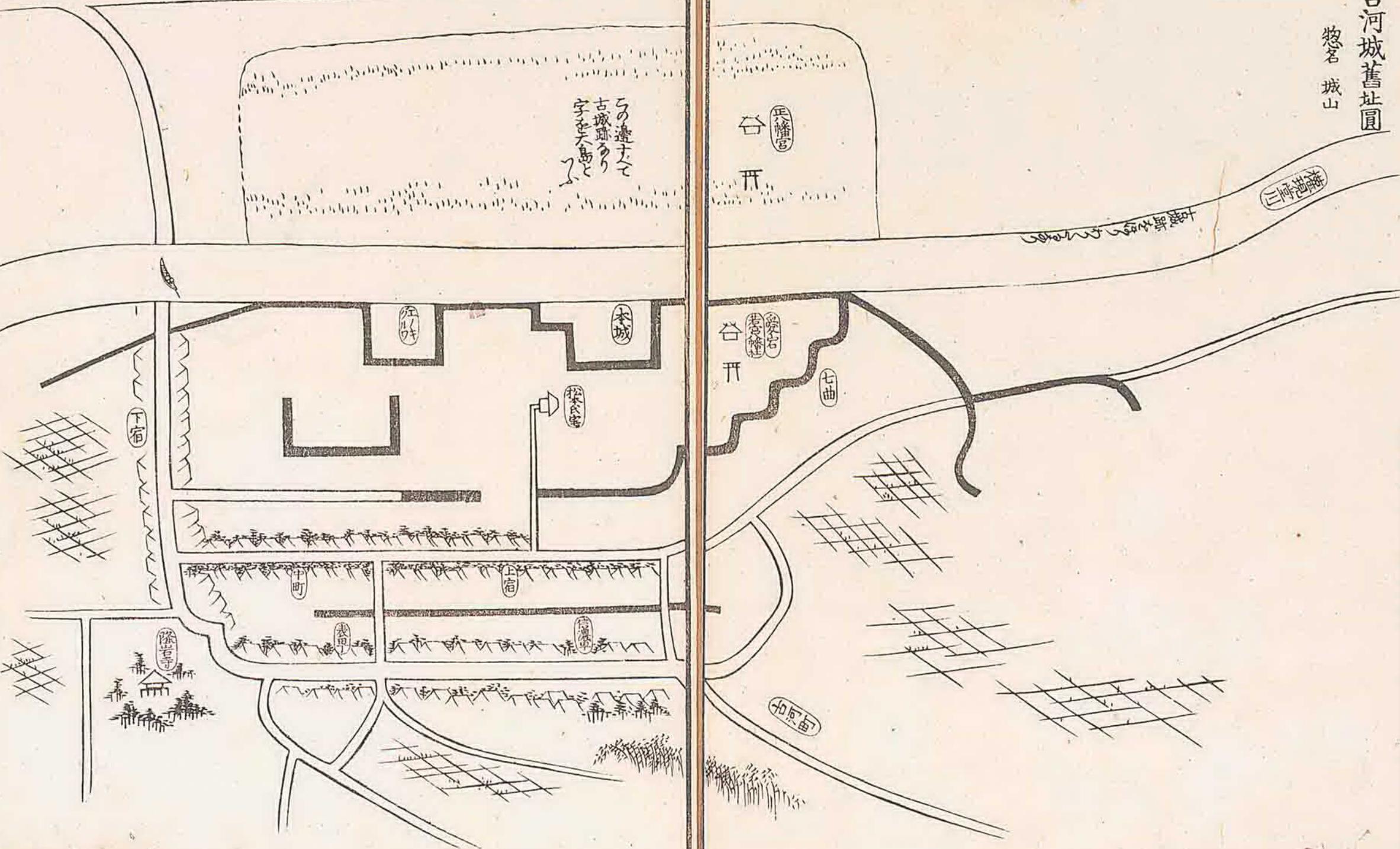
表宿

南門

幸手道

一
馬

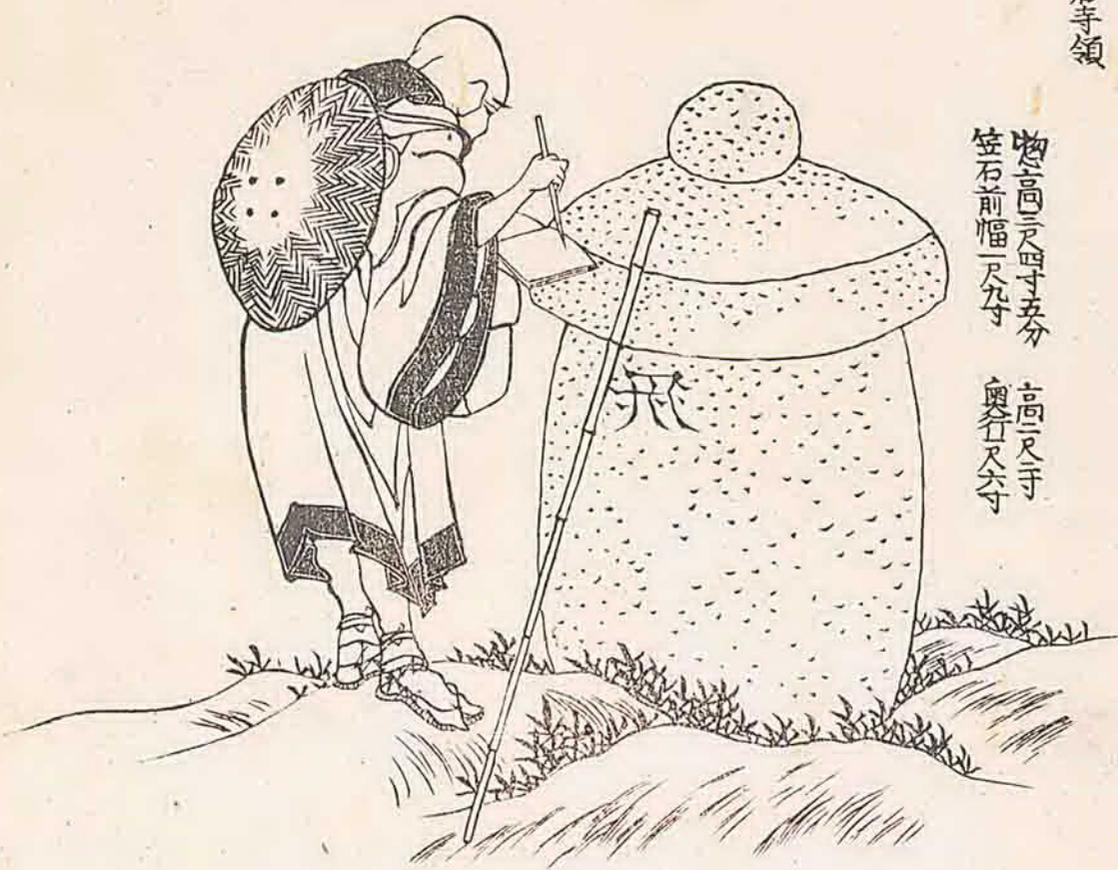
十



元栗橋隆岩寺領

幸館村藥師堂
生月塚

惣高四尺四寸五分
堂石前幅一尺六寸
奥行一尺六寸



岡崎信康君の法號嘯雲院殿隆岩超あぐさ愛宕若宮八幡社七曲の内

越大禪定門といへるふとるといふハ川北ふ在り正八幡宮ハ川南ふ在り外國府間と小右衛門新

といふ古河ふこの城の起立詳きりふまじありず今の古河城ハ長祿元年

由ある名ありきつこの城の築く所ありさてそれより七十一年前ある至徳

三年五月七日小山若丸な官方と爲りて小山がき在祇園城ふ籠れ

る事を鎌倉大双紙上巻あろふ記して鎌倉殿ハ七月二日御發ちゅう向古

河城ふ御座中畧十一月ふ鎌倉へ御歸陣きざんありといへりされハ

今いふ御番城ふみの類あまあるうさる因あまふ由りて成氏朝臣あきとこの邊

不止とまれるあるべしさて永享十二年結城合戦の時結城方より

野田右馬助を大將おほしとして矢部大炊助以下古河城を繕つくろて楯籠

ると同書ふ見ゆ按野田ハ下野國築田郡の地名あり嘉慶元

年丁卯五月十三日古河住人野田右馬助と同

書ふ記せるハそこよその明年ある嘉吉元年四月十六日結城

少若其人書之誠中一陽行不依仁也
之合内之仁善也一我子之仁合
中仁之所系也之子合之族之善
父子之仁從從多矣何仁有也
誠中得誠中言去中是洋為
之仁乃善也父子一人取仁也
其善也由中誠行形也歸人教



百也誠行多效也何一也仁也
用仁也仁善也仁善也
之仁也仁善也仁善也
仁善也何且福也何且仁也
仁善也何且仁也何且仁也
仁善也何且仁也何且仁也
仁善也何且仁也何且仁也
仁善也何且仁也何且仁也

之 廿 蘊尾集

槐系傳令版

乃法善法古法經法龍法
上法教法系之法
多法圓法中法の法
法合可法紅法
乃法善法古法經法龍法

培自 中 初 張 之 以 行 卷
有 世 心 念 之 其 物 子 也
海 國 之 一 一 車 之 業 之 結
法 師 之 思 之 結 也
此 言 抄 判 取 法 之 也
之 之 之 之 之 之 之

由 心 變 之

七月廿二日

萬 壽 寺


梶原景時

長 年 行 記

川妻隱里膳枕圖説

圖する所ハ下總國葛飾郡川妻村名主藤沼太郎兵衛家藏あり昔藤沼氏野州河合里より來りてこの村を開くといふ村中ハ隱里あり響應ある時ハそこより膳枕を借り來り事畢て、還す例あるが故ありて十具を遺一家傳へさるが今猶一二を存すといふ朱漆古様頗奇品あり然れども神鬼の作不似す傳へ聞く佐渡國雜太郡ニ岩不彈三郎狸ありて人ハ金を貸しにりそハ借るべき金の員數と還すべき日限を記し名印を押して置きぬれば翌日穴の口ハその金を置けりとぞ後ハ還さざる人多あり一々ハ金を貸す事を止めて膳枕等を借れるがこれさへ假さずありふきといへりこの川妻のとさる類不や有りむ彈三郎狸の事ハ燕石襍志卷五及び諸國里人談等不載せて人の知る所あり



累年志信得成
永之魏城喜且榮
海心藏板石少
然之各國日下
於後之粒心之
初老犬

可當所
心

壬午
成

六月廿七日
羽部

羽部
大満多奴

處こ野田右馬助以下の人々結城を根城といて楯籠りにるが
落城の由を聞て寄手の未近ちかうざる以前こ船ふ取乗り行方不
知お落ちふれり矢部大炊助以下残留りて野田讚岐守おに誅ちと
いへりその古河といふハ古利根川よに因れる名あるべし城の
正の頃ふと有りしと見えて今の古河城修覆の間小笠原城の
信州侯權ふ移住せる事あり隆岩寺ハ其時の草創といふ今の
古河城ハ康正元年六月十六日京都將軍義政公今川範忠命
鎌倉を破るふ及て成氏ハ總州葛飾郡古河縣鴻巣といふ處
を權かり小屋形を立て關宿城ふ築田を籠め野田城ふ野田右馬助
を籠置といふ事鎌倉大双紙下巻不見ゆ日光驛程見聞雜記古
四五町ふ鴻巣といふ所あり古河公方成氏の御所跡二の後成
とぞその名のいひ傳ふ畑ふてその形も知れずの後成
氏ハ武州國府ふ落ちそれより總州葛飾郡古河縣ふ落着敗軍
の士卒を集め下河邊城ふ籠りひると同書いへり是今
の古河城ありそハ下河邊ハ古き庄名あるが成氏朝臣のこ、

小座おせしより縣の大名を稱する事とありあるべし按小永
成氏ノ移ラセ玉フハ故下河邊庄司行平ガ館ト聞エシ古河城
ナリ其後城南鶴巢トイフ處ニ有御所作といへるハ前後の差
あり松本勘兵衛といふ入あり古より古城迹ふ居て其處の事を
掌りり城迹草地堤堀共ふ六万坪外ふ田地十三町歩を有ちこ
りしといふ今ハ古ふ如くずとふむ

ついでハみやの乾何とあり古城山とひときつふあり古城庵 松本可成

沙山 元栗橋の新田トヨふ在り方二町許こ、ふ登りて一望
すれバ川流四面を圍み匝一富士日光筑波の山々雲間ふ出沒一
て風景最佳一春夏の間雅客遊觀の處とす

富士見渡 江川より關宿向河岸ふ渡る處あり富士の眺望此處
を最勝とす

六國山東昌寺 山王村東昌寺ふてハ山王山村といふ在り築田
河内守滿助の菩提寺あり禪宗

制札寫

條々

下總國

東昌寺

- 一 當寺同門前百姓等急度可還信事
 - 一 寺家門前不可傳之等因畑立毛不可妨之幸
 - 一 對寺山前赤軍狼籍非分、故於有之者可為一踐切幸
- 右若於遠犯、軍卒忽可正處嚴科志也

天正十八年六月 日

鐘銘

大日本下總州下河邊庄櫻井卿六國山東昌禪寺大鐘

願主 大旦那 築田河内守持助

時文明八年六月廿四日 住持毗丘即菴老衲

關宿城 此の城ハ古河公方の臣梁田氏の築く所あり梁田ハ從
 來下野國人今も下野に梁田郡梁田村あり世々鎌倉公方に事へりか

くて永享十年十一月一日築田河内守同出羽守等持氏卿の相
 州大藏御所を留守一三浦介時高と戦ひて死すこの後嘉吉元
 年四月十六日結城落城の時持氏卿の息春王安王の爲に築田
 四郎ハ長尾因幡守討にれ同出羽三郎ハ武田刑部少輔入道
 討にれりかくて寶徳元年九月九日春王の弟成氏朝臣關
 東の都督と爲るに至て結城の一黨と同く出頭の臣りこの
 後康正元年六月十六日京都將軍義政公の命に因て今川上總
 介範忠鎌倉を破るこの時成氏朝臣ハ下總國葛飾郡古河縣鴻
 巣に移りて關宿城に築田を籠めり由鎌倉大双紙下巻に見
 ゆその明年正月十九日成氏朝臣の命に因て南圖書助等と同
 く千葉介實胤の有る下總市川城を陥るこの頃築田河内守
 ハ關宿より打て出て武州足立郡を過半押領し市川城をとる
 と同書不見えりこの後築田中務大輔頻に上杉と和親の事

を勸むこの後變革千般あり弘治二年十二月十五日北條氏康より晴氏義氏兩君を關宿城へ移し繁田中務少輔政信をして守護せしめざる事關東古戦録卷六に見ゆこの後上杉輝虎を防ぐむして加勢ふ來りし結城六郎晴朝と永祿三年正月四日柳橋ふ於て誤て同士軍せし事同書卷九に見ゆかくて天正元年閏十一月十七日繁田中務大輔政信同出羽守綱政佐竹義重ふ降るを以て北條氏政の兵ふ敗りれ佐竹の遊客と爲り城ハ北條家ふ屬せる事卷十九に見えりさて同十八年七月十一日小田原落城の後同八月九日領地拜領中畧下總國古河小笠原信濃守秀政同關宿松平三郎太郎康元同關宿内岡部次郎右衛門長盛一萬二千石任内と房總治亂記に見えり因州侯の墓碑ハ臺町ある觀照山宗榮寺當寺開基大興院殿前因州太守傑傳宗英大居從四位少將松平氏源康元墓行年五十四日と鐫り背面ふ爲當寺康元之墓草創年來而自破壊于時明和三丙戌歲八月十

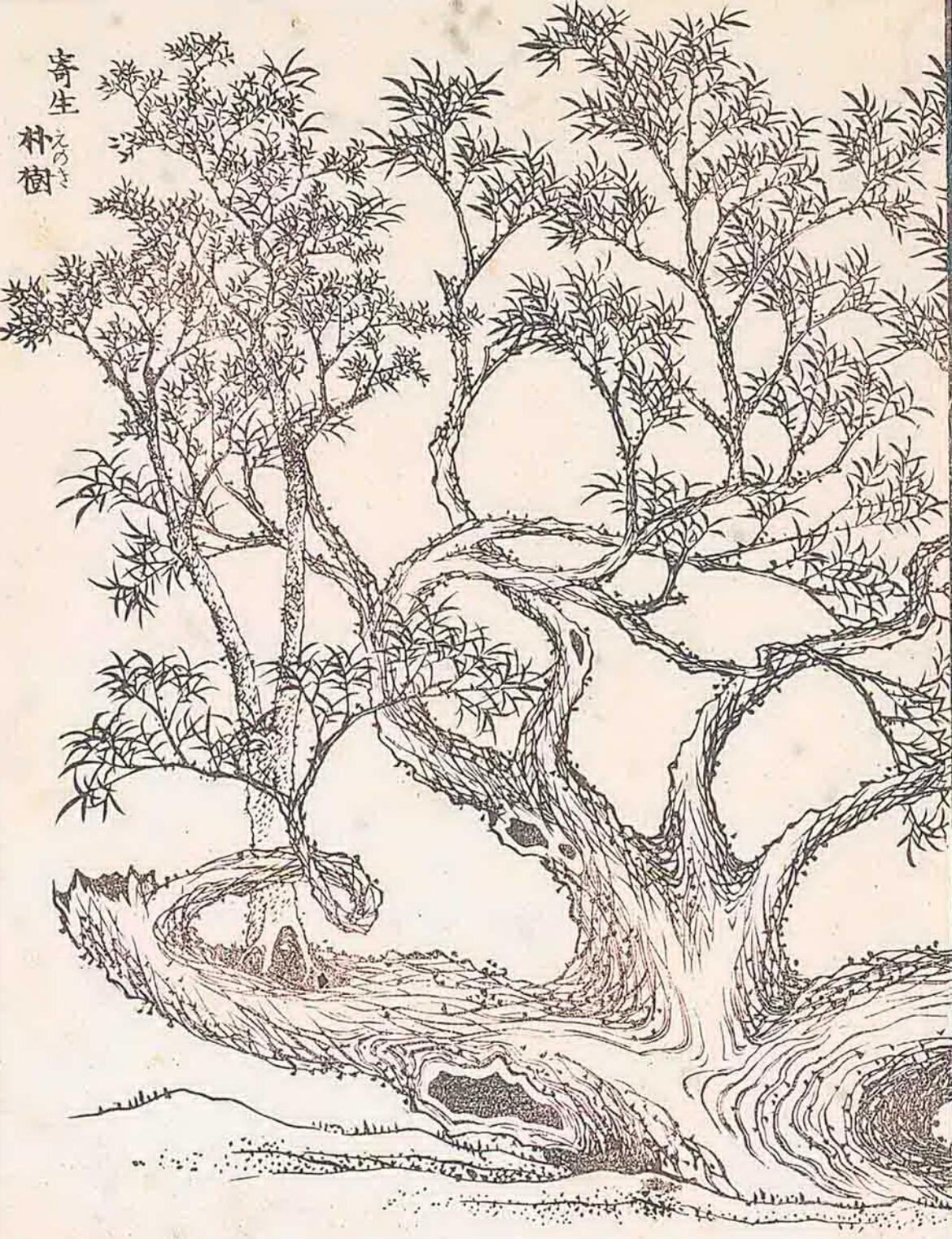
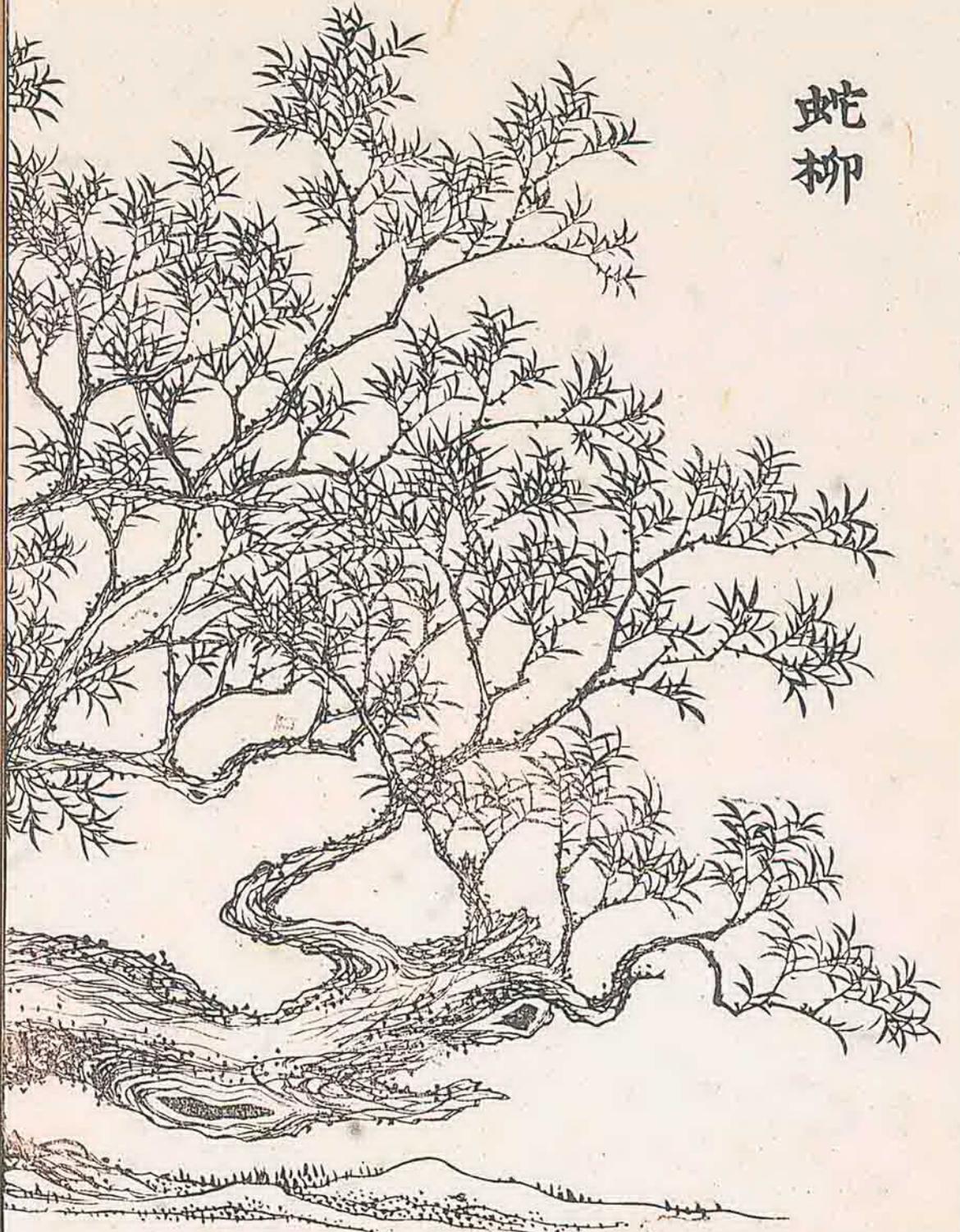
四日從五位下源朝臣松平久世家の領と爲りしハ安永三年ふ因幡守康卿修補之とありりなりふり今不至るまで嗣封の君侯世徳澤を布きひて萬民鼓腹し市鄽繁榮あり東ふ臺町南ふ江戸町内河岸元町内町あり内河岸の對岸ハ向河岸ありこの二處問屋船宿多く最繁華あり江戸ふ行く旅人舟ハ向河岸より出づ江樓ふ柳樽を開き江岸ふ柳枝を折るその景況喻ふるふ物あり

寺院ハ國花萬葉記卷十ふ松窓寺洞家關宿在寺領廿石と見え諸國圭齊錄下總國新義眞言部ふ十五石葛飾郡關宿昌福寺と見ゆ

古河晴氏朝臣墓 宗榮寺後の園中ふ在 高五尺許土人字して御所卵塔といふ晴氏朝臣ハ永祿三年五月廿七日卒を法號ハ永仙院殿系山道統あり



蛇柳



寄生
村樹

川南

三二

大柳 關宿城東半里許葦場といふ處に在り故に葦場の大柳といふ中利根川より三四十間南方堤の内園の中あり廿年前ハ枝の下一丈許ありといふ今ハ草地と爲れり大枝三不分クれ各太三四圍南北延衰十四五間許南の枝不補樹の寄生あり大四尺許その本幹の蟠る不因て命にて蛇柳といふ一奇事あり時としてこの柳川北不見え夜行の舟不方向を失ハ一む此蓋層樓の類ふ一て川北の空氣不映ずる者あり是を以てまゝ妖柳といふ

堀割 關宿の邊ハ卑溼ふ一て水患多一故不嘉永の初領主より命一て城東ある桐作木間瀬舟形木崎等の村々六里の間不水道を作り水堀より利根川不落一永く水患無かり一む民甚これ不頼るこの桐作不眼科醫鳳梧あり畫を好む
春候此交者梅
つけさけてそろこのむきハぬぐこづけてまひあがる

これハツケタゲといひて古き相歌の由鳳梧この邊の事ども
談る因不言へり

お、腹くつてう明神 水堀村不在り傳聞往年三月初午の日利根川洪水ふて大なる木の方不一て中不穴あきころが流來り一を朝艸刈る者共これを上レむと爲一うと重さ白の如く不一て揚らず乃繩不て柳不敷置村人を聚め各飽食せ一め同音不オ、ハラクチイナエンサラハウヒ囉一おかりこれを引揚不て産神不祭れり今もその例不因て毎年當日右の木を神輿と一村中の新夫不昇か一む利根川の畔不十間四面の池あり祭の前日その池泥をとりて周不置一む而當日神輿を池中不昇入る、不村人池周不羣集一同音不オ、ハラクツテウエンガンバウイ、ツモカウナラヨオカンベエと囉一つ、泥を池より上りむとする人不と神輿不と擲ちてあけさてねバ困

川南

三三

いをてさる時昇人の妻どもわびて漸る池より上がりせ身を
も神輿をも利根川へて洗ひ妻のもとて來さる新衣を著るこれ
より村人神輿を受取り元の如く社へ收むこれ例祭ありとぞ
我慢 我慢とハ努力の義も轉言へりこの處水堀村の下ふて
衣川落合の衝あるから流頗急あるを舟子共聲を掛け今少
の間ぞ我慢々々と言ひより遂ふ名と爲りありこの處河
水最佳といふ
布施辨才天社 布施ハ江戸より松戸小金を経て水海道へのゆ
くてあり田中ハ孤山あり古ハ湖中の島ふりとぞ辨才天を祀
る東麓も窟あり別當を紅龍山松光院東海寺といふ眞言宗常
陸國大塚護持院末あり寺寶も蟠龍石あり此處ハ關東三辨天
の一ふして詣人羣集一戸頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺め
て頗勝景と稱する不足れり

縁起云昔大同二年七月七日の朝湖上ハ紅龍現れ一の塊を捧
げて島を作る天地震動一夜々光明あり天女里人の夢入り
て但馬國朝來郡筒江郷より來れる事を告ぐ覺めて光を尋ね
窟へ入れハ長三寸餘の尊像あり乃藁葺の小祠を建つその頃
弘法大師の經過も値ひてこの事を語る即大師嚮も筒江へ於
て刻する所あり乃この寺を造り山を紅龍と命け里を天女の
利益も資りて布施と命かくて歸洛の後嵯峨帝も奏聞一弘
仁十四年田園を寄附一伽藍を造立す然るも承平年中將門の
兵火も遇て衰廢す經基王武藏守と爲て箕田城へ住する時此
處も來り忽瓦礫場松上の光を見狩衣の袖を刷ひ祈念せし
ハ尊像即袖も移りゆふを奉持一天慶三年二月將門伏誅の後
この寺を再興一院を松光と命く今の本堂ハ享保の初法印秀
調が建つる所あり

取意○按も經基王武藏守も非ず介あり將
門記も武藏守興世王介源經基と見之り

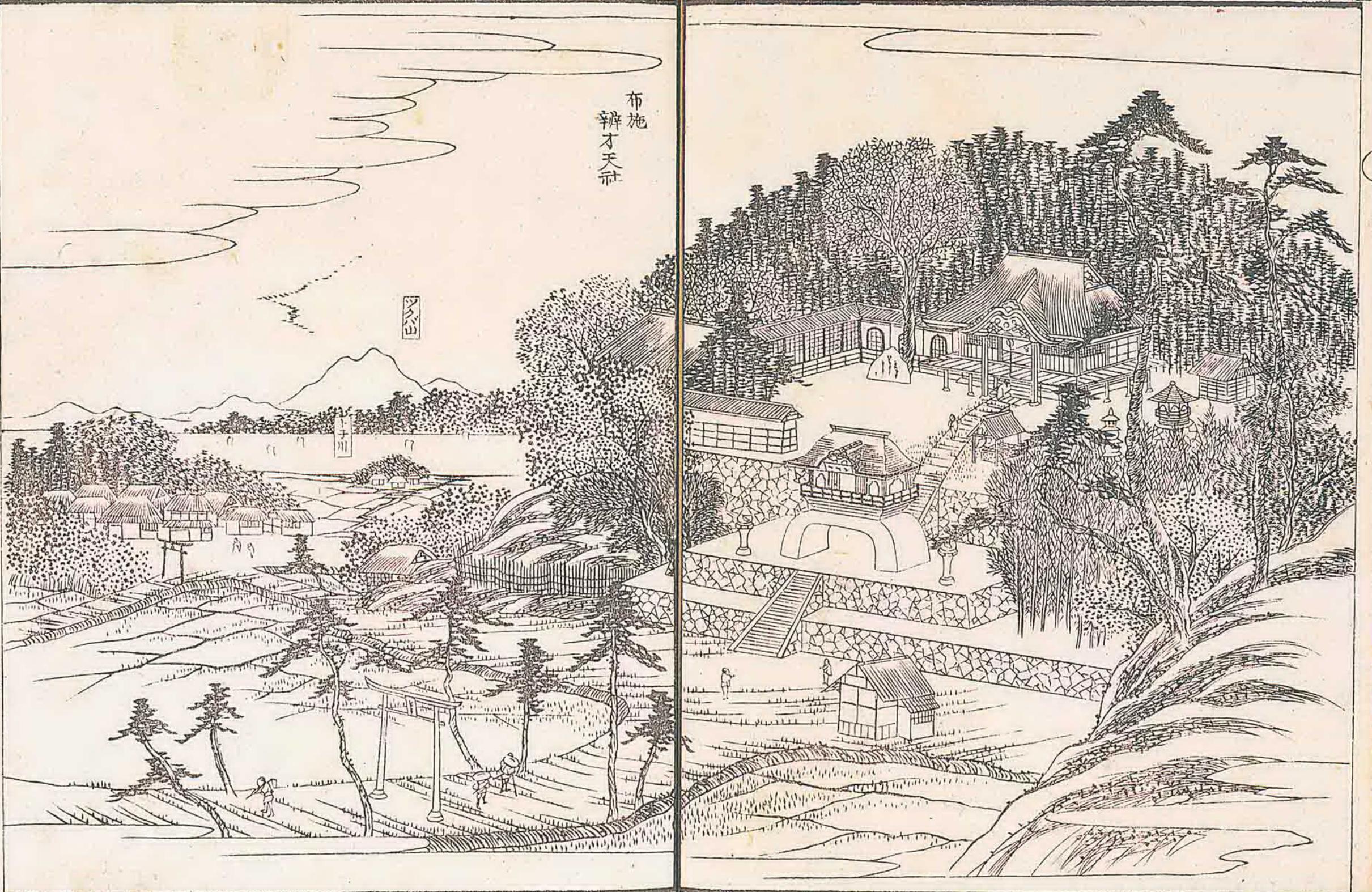
布施
辨才天社

ツク山

三川

三川

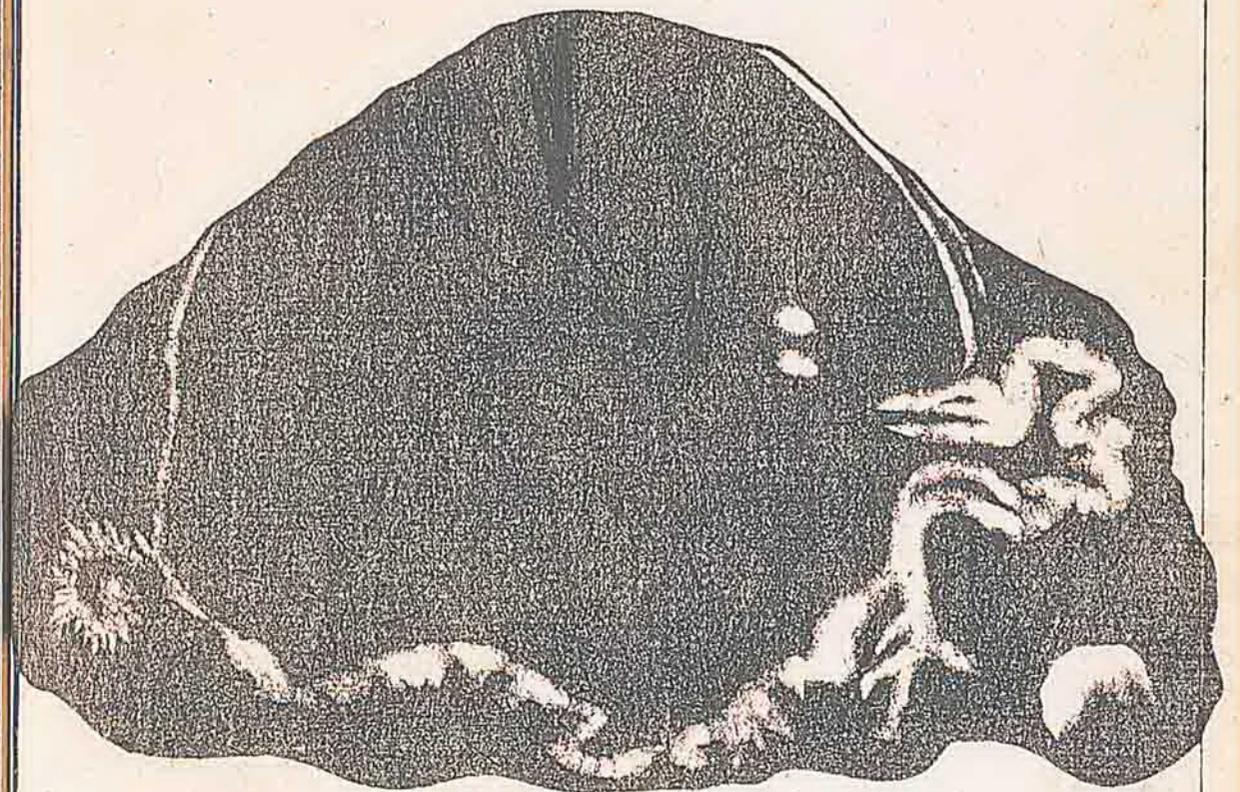
二十五



蟠龍石
 按ふ龍丈石の事、素園
 石譜卷三、魚龍石
 潭州湘鄉縣山之巔有
 石、中界間有石中兩而
 魚龍形、作蛇之勢、鱗
 鬣爪牙角甲悉備、尤鳥
 奇異、といへり、されど
 り龍丈、黒色、ある由、
 見え、て、この石の青質
 白章ある、み比す、れ、
 いさく下れり

大、如圖

實希世之珍
 祀爲宇賀神



この社地ふ於て八月朔日毎年風祭相撲あり又巳年の三月ハ
 必開帳あり岡村の延命寺に埋めたる土偶及び駒塚に埋め
 三、見えて葬送の具
 むるべき由いへり

玉椿登とてや布施筈

其角

白菰と春八ねまれ布施の森

慎我

日天子社 相馬郡青山村に在り手賀沼の北に在り土人ハ御天様

といふ一奇事あり凶年の時社地不夥しく芥を生じて近郷數

百人の食ふ供す然るふ平年ハ少も無くと村長海老原氏話

り又この社の周ふ多く生ひさる篠竹を截れば血流出てその

人不崇ありとして一も伐る者か海老原氏又一奇話をいへり

四月十八日同村助の妻機を織り居るに井四、五歳許の僧來

りて水を乞ひて自家の井の地を浚ひて呑むべからず井を

高き清水ありて水を乞ふ者夥しく耳目を聳動するを以て官より

禁せりる猶水を盜む者断えずと亦む

御寮法性墓 青山村の東都部村大龍山正泉寺禪宗本尊の後

在り五輪の石塔あり法性ハ最明寺時頼の女不てこの寺を建

立命けて法性寺といふ然る不一夜この尼住持の夢不現れ

て在世の榮華の爲不手賀沼の毒蛇と爲り十六の角を戴きハ

万四千の鱗を生三熱の苦を受くる由をいひ血盆經一千卷

を讀誦して苦惱を救いむ事を請ふ覺めて後地藏講會を修せ

しうハ夢不八旬餘の老僧來り明朝手賀沼不行き見るべ龍

宮不藏する血盆經を汝不與へむ墮獄の苦を免れむと思ふ女

人ハこの經を受持すべとて乃夢ハ覺不れり是地藏尊の化

身不ありとぞさて明旦手賀沼不詣りし水率に動騰し白蓮花

一莖漏出し中不血盆經一部あり乃村を一部と命け山を大龍

と命け寺號を正泉と改め題して日本最初女人成佛血盆經出

現第一道場といふ血盆經縁起取意

下利根川 蠶養川落口以下をいふ南ハ江藏地新田ありこの邊

より安食までを鯁魚の絶品とす

堀町 猿島郡の地關宿の對岸結城のゆくて不して繁昌の處

あり月々六載舟を江戸不出し以て行旅不便すこの下不ガッケ

といふ處あり下小橋と浦向不屬す近郷より薪をこ、不出し

以て中利根川不浮ぶ

女夫松 長谷村鶴戸沼の傍在り結城のゆ香取社不在り圍一

丈許その葉晝ハ常の如く夜ハ合して離れず故不又眠松とと

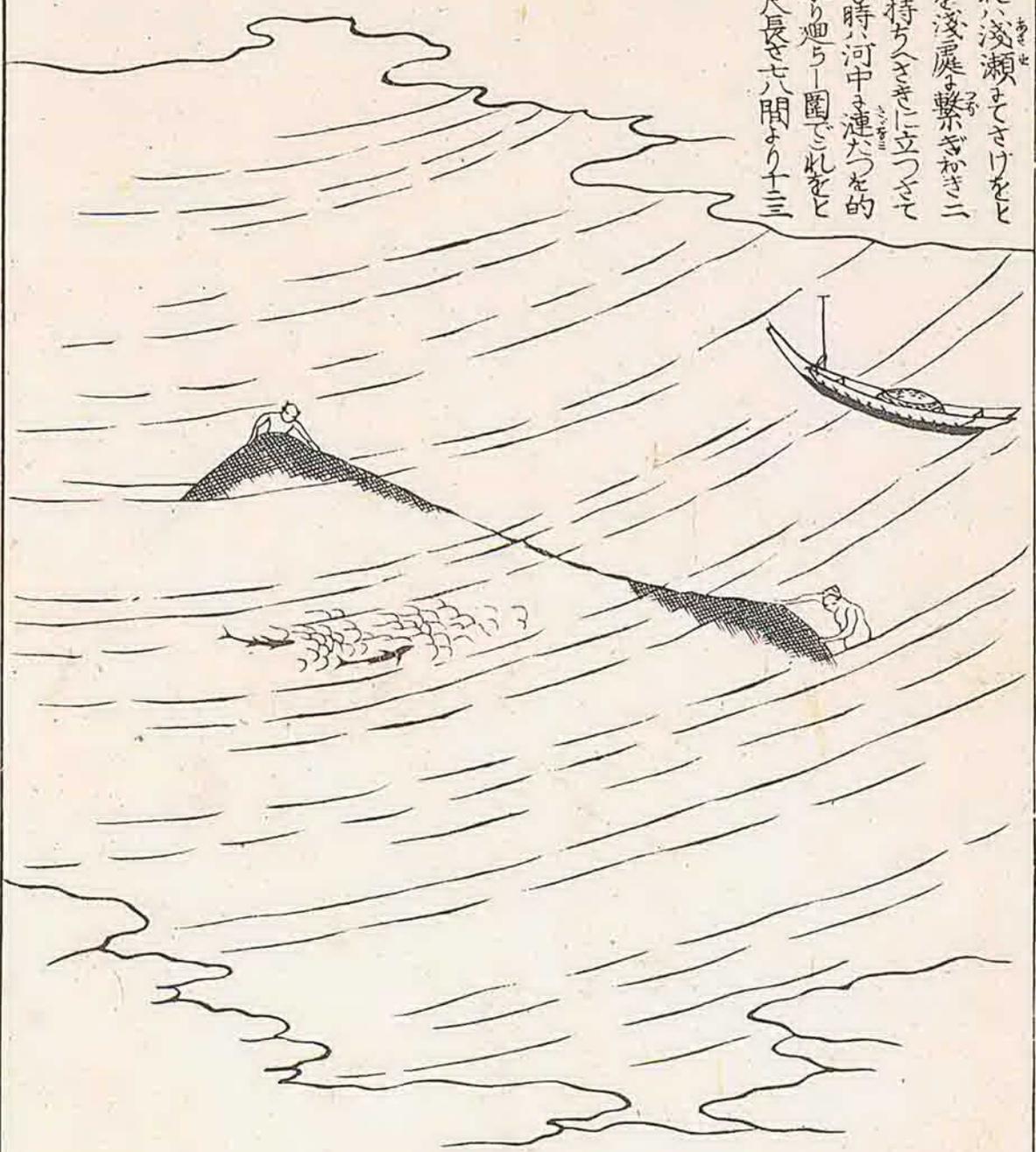
いふこれを煎服すれば難産の患不しとて人々取貯ふこの香

取社より一町許北不乳房觀音あり

鶺鴒 又長須沼といふ源ハ洙谷一谷の邊より出屈曲三里

餘不して小山不至り中利根川不落つこの處ハ嘉永四年の堀

歩掛 あれは淺瀬までさけをとり
 法かり船を淺瀬に繋ぎかきこ
 人裸まで網を持ちさきに立つて
 さけより来る時、河中に連たつを
 とて網を張り廻らし圍でこれを
 網の幅五六尺長さ六間より十三
 間に至る



割ありすべてこの邊の地勢を相馬日記卷三ある齋藤徳左衛
 門の談不并せて考ふる不げ不往昔ハ蠶養川衣川飯沼の下流
 不連あり共不大なる湖と爲り一を相馬偽都の要害と一利根
 川畔不ハ但矢作等の小地を存せるあるべし三河御風土記卷
 八年下總國葛飾郡矢作三万石を鳥居彦右衛門元忠知行せる
 由見ゆ然る不房總治亂記不上總の内ヒ一て同矢作鳥居彦
 右衛門元忠四万石されバ下出島の西不島廣山の故跡とて有
 といへるハ誤り
 るハその湖の畔不て有りぬるうこの邊寺社の事諸國圭齊録
 下總國禪宗不三石 後嶋郡大谷口村三石 妙覺院天台宗不三
 石 後嶋郡光作村三石 眞言三石 後嶋郡本陽寺新義眞言不十五
 石 後嶋郡岩井村三石 同宗妙光寺三石 同村敏院三石 矢作村自立村三
 石 後嶋郡延命寺五石 同村戸喜寺五石 同村知敏院三石 矢作村自性院三
 石 鷺明神同院五石 同村歡喜寺五石 同村清光院三石 後嶋郡大安寺二石
 小鷺明神同院五石 同村歡喜寺五石 同村清光院三石 後嶋郡大安寺二石
 山圓坊五石 後嶋郡西光院三石 後嶋郡觀音寺三石 後嶋郡觀行院
 大圓坊五石 後嶋郡西光院三石 後嶋郡觀音寺三石 後嶋郡觀行院
 若林村五石 後嶋郡西光院三石 後嶋郡觀音寺三石 後嶋郡觀行院
 三石 金剛院時宗不三石 二石 二斗 後嶋郡觀音寺三石 後嶋郡觀行院

嶋郡大光作十石國玉大明神 後嶋郡岩井村五石八幡宮 長須坂

治部丞あど見えり

保地沼 岡田郡飯沼の下流あり末ハ二不分れ法師戸不至りて

中利根川不入るその下の方ふる流平時ハ水無

衣川落口 相馬郡大木村不在りて、の川中不我慢といふ處あり

對岸ハ水堀村あり衣川本名ハ毛野川不て續日本紀卷廿九

天平寶字二年條常陸風土記新治郡注不見ゆ延喜兵部式不下

野國衣川驛倭名鈔不下野國河内郡衣川と有ると專この川不

因りての名あり 衣川歌枕名寄卷廿四不懷中抄を引ルりこの

國誌上卷相馬日記卷一 外國雜記不と歌ありあ不この川の事常陸

下野國志不と見えり 普門山禪福寺 筒戸村不在り諸國圭齊錄下總國禪宗不十三石

八斗余 相馬郡筒戸 禪福寺と見ゆ ○相馬日記卷三云筒戸村の禪福寺

といふ不詣て、洪鐘の銘を讀む不大日本下總州相馬郡筒戸

村普門山禪福禪寺万治三庚子天七月初三日住持當山中興開

山大麟玄綱比丘尼銘焉とあり本尊ハ平將門が渴仰せし等身

の十一面觀音の木像ありもと上總國の花岡といふ里より遷

しまゐらせとありといへり等身の由來ハ二中歴不見ゆ 二 中

二造佛歷佛像寸法之條不五尺者弘法傳漢土時人長寺の傍不

也近代謂之等身と北條時鄰が標注不見えり 寺の傍不

最舊き石卒都婆あり鑿りたる字無ればその姓と名とを知

りず寺僧ハ相馬氏の墓標ありといふ又玉山宗雪慶長十六巳

二月今日と鑿りし五輪あり連歌師あどのこ、ふて身まゝれ

るふや 平將門舊址 平將門の事ハ將門記 大須本 大系圖扶桑畧記卷廿

五大鏡卷一外記日記卷一二舊本今昔物語卷廿五古事談源平

盛衰記卷廿三本朝文粹卷二元亨釋書卷十皇和真俗通卷十二

大日本史卷卅二日本外史卷一不見えて遍く人の知る所あり

然して佐原の清宮氏多年この事迹を考へ勞くれば今ハ彼人ハ譲りて此ハ相馬日記を省畧して記す并せ考ふべし相馬日記卷三云守谷野ハ最廣き野ふて目も遙不見かずむ許あり是相馬の偽都の構の内ふて兵士らがいむらひ跡ありといへり矢田部海道を経て行けば守谷の里あり德怡山長龍寺の門ハ淺野氏と木村氏とが花押せし古き制札あり又牛頭天王の社ありてその御形ハ鏡ふ坐す裏ふ下總國守谷卿牛頭天王守護所大同元年丙戌九月廿一日神主吉信と鑄つけたり村長の齋藤德左衛門が家を訪ひし主人喜びて俳諧師鳥醉がこの里ハ遊びし時記し記とう出て見せたりさて德右衛門文伯醫師木村氏嚮導して相馬の偽都の舊跡尋めて分るふ先相馬小次郎師胤が城跡ありて今ハ乾壕弁形ふどの形昔の儘ハ残れり師胤ハ千葉介常胤が三郎子ふてその裔相續ぎ應仁

年中までこの城主ありといへり按ふ相馬氏の没落ハこれ國眞壁郡下妻の多賀谷修理大夫高經が小田天菴滅亡の歴乘じ地を廣めむとて下總國岡田郡古間木城の渡部周防守元綱を攻めし事を常總軍記卷十二ハ記し相馬城方加勢の兵羽生式部石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐彈正添屋を以て相馬郡守谷筒戸の兩城主相馬左近大夫治胤を伐しめたる事關東古戦録卷九ハ見ゆかくて明年七月十一日小田原落城の後佐倉東金等と一時ふ落去し同八月九日領地拜領下總國の内ハ同相馬菅沼山城守定後元和といふ年の頃土政一万石と房總治亂記ハ見えたり岐氏の君こ、不生まれしが上野國沼田城へ移らしてよりこの城遂ハ廢れぬとぞ島の中道を東へ廿町餘行けば大塚曳橋かどいふ處あり平臺といふハ最高き岡ふてこ、そ將門が住こし所ふる又眩く許の深き壑を渡りてハ幡廓ハ移る將門が齋き祭りし妙見八幡と申すがこ、ハ鎮座しを今ハこもり山の西林寺ハ移しまるらせりといふ山下文小こもり山の擁護の西林寺ハ移しまるらせりといふ山下文小こもり山の擁護山清淨光院といへりとぞと見ゆ諸國圭齋録下妙見八幡と申總國禪宗相馬郡ハ二十石西林寺と見えたり

す由ハ妙見菩薩と相殿ふ祭れるふや昔物語不將門ハ幡の
諸宜を偽り一事をいへりこの所よりハ千町の田面打越一奥
陳涉ガ狐鳴ふ近き事ありこの所よりハ千町の田面打越一奥
山一臺向地赤不け岡村がううふどいふ所々目路遙ふぞ見
渡されたる齋藤氏語りはりく古ハ相馬の偽都の周ハ都て湖
湛へてまゝさき要害の地あり一を寛永といふ年の頃衣川の
流を南へ決りて數万頃の新田をバ開られといへり今と猶
田の真中不池残りて蓮ふびの生ひたる多うり熟相馬と命
一名の所由を考ふるふ所の體淡海の中の一庭されバ狹場と
いひむを音便ふさうまとも轉一いふふるべ一按ふこの説
猿島ハ小島の義あるべしさるハこの瀦古最大ふて周ハ長
洲等のミあり一が漸ハ水涸れ泥乾きて許多の村々を爲ハ
あるべしおさるかり古ハ今ハ相馬郡の地多ク猿島の方ハ入
りふるとお賀谷高經下總國岡田郡發向の書を記ハ常總軍記
卷十二ハ多賀谷高經下總國岡田郡發向の書を記ハ常總軍記
田郡を攻むる諸士極めバ猿島郡岩井若林生む出嶋中里皆掛猫内
筵打の邊の諸士極めバ猿島郡岩井若林生む出嶋中里皆掛猫内
見えされどこの末ハ猿島郡岩井若林生む出嶋中里皆掛猫内

りるれハ猿島と最危一加勢せずハ有るべし馬洗の横
瀬主膳菅生の石塚權兵衛内守谷の橋本石見野田の野田角牛
實珠花の平岩主水大山の大山一學以下七百餘騎ふて馳來る
とハ一ハ野田實珠花をおきてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
べし又長洲ハ古長須郷ともいへりそハ諸國圭齊録下總國淨
土宗猿島郡長須村東光寺十五石猿島郡文殊院かううが
四石猿島郡長須村感徳寺おと卿村通一ていへりかううが
原といへるハ田中の離島不て縦横ふ上道一里餘の廣野あり
昔淡海の廻れる時ハえもいハぬれ一きの島ありむとぞ思
ひやれる、今この野中を行く道をかうう海道とよべり卯
かううといふ名何とも心得がまきをよくおとへバ將門記
今昔物語おと不辛島と見え一をかううといハ訛れるふて辛
島の廣江といへるもこの周の田とあり一所を指せるあり
この辛島廣き地不て古ハ郡の名不もよびたるハ將門記不常
陸介良兼ハ將門を襲ひて下總國豐田郡栗栖院常羽御殿を燒
き一餘ハ將門を勞身病隱妻共宿於辛嶋郡葦津江邊依有非
常之疑載妻子於船是於廣河之江といへるも瀦の大なる不
りて廣河廣江といへるハ其の畔の蘆場を葦津といひたる不
さらバ以相馬郡大井津号爲京大津とあるもこの邊あるるか

くて天慶三年二月十三日貞盛秀卿が將門の宅を焼き一條
新皇擬招辭敵等引率兵仗隱於辛嶋之廣江と有りこの時焼く
れ岩井卿島廣山故跡といふ者これ平時ハこの住
馬郡事ある時ハ守谷小棲する此へさバ明る十四日
の戦且辛嶋郡之北山張陣相待矣といへりかくてこの日
の戦始ハ將門上風不居勝ちて敵を逐ひ却て風下と爲り再戦
ひて敗死せるも直北を逐へりありて江を周て逐へ
る事知るべしこの餘ハ清宮氏の考を待つ又將門記古事談ふ
の文誤あるハ改めて引きつその意にて見ゆふべし古事談ふ
ハ島廣山と見ゆこれハ廣き島山然ふべき事あり佛
島といふハ堀を廻りて構へし所ハ草木茂り暗がりておぞ
ましき古墳あり中少許艸おひぬ所あるを強く踏めバ地ふ
響ありて聞こゆこれヤこの兵器ふとあま埋まらぐ故ふそ
の鍊氣ふ因りて草と木とおひいてぬあるべし里人これを將
門が墳ありといへり佛島と名づけしハ傍ふ地藏の石像又ハ
何くれの佛の石像立てればあり坂を登りて高き岡ふ大日堂
あり古き松ふと有りて眺望好しき所あり將門がうまれし跡

ありといふ熟この堂の貌を見るふ古墳の上ふ建てたるあり
これ將門が骸を埋めむ所ふてかの佛嶋ハ伴類の屍ふヤ兵
具ふと埋めたるべし米野井の桔梗が原といふハ將門が妾
桔梗の御前といふが殺されたる所ふてその墳あり今も桔梗
ハ有りあぐら花開く事あきハこの御前が怨ふ因れるありと
いへり海禪院といふも間近しそこハ將門が高野山の貌を摹
して先祖の墓を造りし所ありこの寺の新皇堂といふハ將門
が靈を祭りて國王明神と稱へしり按ふ諸國主齊録下總國禪
高野村海禪寺今日廻り見し相馬の偽都の體を思ふ上道四
と見えたり
里許が間ふて湖の中島ふれハ上とふき要害の地ふれど朝廷
不叛き奉りしうハ僅九年をうりし一門悉亡びふき
うづ波の風ふあれむ幸島の廣江をあせておとよきとせ
高田與清

按ふ相馬日記ふ相馬小次郎師胤ハ千葉介常胤が三郎子あり

和田村の由右衛門あるがこの二人の事ハ勸善録不載せり
そも勸善録ハさよであらぬ人をも載せざる謂あれどこの二
人ハげふ載すべき績あれ
バ引きて因ふ下不記す

勸善録中卷云下總國相馬郡岡村の林兵衛和田村の由右衛門
藤兵衛三左衛門おと多く孝貞の友聚まりて廢田一町九段許
を開きりりその廢田不澁田鹿田おといふ名あり澁田とハ窪
き田不て水常不溢れ稻苗水の爲不腐れ廢るをいふ鹿田とハ
土質よろうろず水も足りぬをいふとあむその里の佐兵衛
七郎兵衛人名おとさる廢田とさりたるを林兵衛由右衛門藤
兵衛三左衛門と輩田主不力を合はせて墾開き今ハ良田とあ
りて年ごとの貢米滞おく奉れりといへり

大鹿城址 天正年間小田天庵の麾下あり大鹿左衛門の居處
あり常總軍記卷十一云爰不下總國相馬郡小文間一色宮内ハ
小田の味方不て有りうこの頃佐竹不降りて近郷を脅し手

を廣くせむと思ひ一がかねて中惡うりにれハ先大鹿不攻懸
て大鹿左衛門を亡不一かの世帯を押領せむとて二百餘騎に
て不意不大鹿へ押寄せり時一と大鹿左衛門ハ野勞不て居
さりたる所不関をあけうハ家子須川平治を呼び何者うよ
せつらむ思ふ小文間の一色めあらめ憎き奴らささりあら
り我此體不てハ中々矢の一筋も射出難一足弱を片付にて
我ハ腹切るべ一汝宜く片付くべ一と云うハ須川表不走
出て家人を聚むる不漸雜人共ふ五十人許ありうハ先奥方
を始女童を皆呼集め後の山傳一てかりき命を遁れ同所の弘
經寺へ隠しり是大鹿が菩提寺ありかくて足弱を片付れ一
うハ今ハ心安一と須川を始切て出て散々不戦ふその際不大
鹿左衛門心静不切腹すこの文の續ハ下の
小文間條不記す

按に大鹿の城址ハ弘經寺の三町むかり南ある山上不在り山

南の田園を城下といふ其處の田中不鹿塚とて有るハ由有り
げあり

大鹿山弘經寺

諸國圭齊錄下總國浄土宗部云五石

相馬郡相馬卿

弘經寺

常總軍記卷十一云大鹿弘經寺ハ浄土宗あり下總國岡田郡飯沼弘經寺の隱居所ありといふ又結城ふも弘經寺といふ有り同宗あり中畧大鹿ハ十八檀林の外ふて百石御朱印あり權現様眞那板御書法下トあり因て今不眞那板御朱印といふかりすべて浄土宗常總不弘經寺といふ寺三ヶ寺あり

大鹿山長禪寺

鹿島日記云近嶺德基と共に最高き石坂を登りて大鹿山長禪寺不詣つこ、の利根川不臨きて西南の空遙

そらたろう

不富士峯のみさけりれとるえと言ひ難一寺ハ妙心寺派の禪宗不て文曆といふ年の頃織部時平てふ人金を施して建つとかむ時平が法名を記してる位牌不大悲院殿花輪平公大禪定門と見ゆこの里ハ昔大鹿左衛門某が住こ一岩の跡ありとぞ按不大鹿の城址ハ既不上言へるが如く此處ハ岩の有り一あるべし城址ハ此處の西稍北不在りて十二三町を隔つ

さてハ麓ある取手宿ハそれ不因れる名あるべし中畧近隣不

臺宿村あり取手宿より東不續きとり古き名ハ何といひむ

今臺宿といふハ取手よりも高き所不在る宿おれハあるべし

臺ハタヒラの省謬ある由下ふいへり

按不諸國圭齊錄下總國禪宗部不五石三斗 大鹿村 長禪寺と見

ゆ境内不光音骨堂あり 寺寶不光音の光音ハ此邊不四國八十

ハ所の靈場を摸一設けとる人ありそハ

大鹿山長禪寺 同村 地藏堂 同村 不動院

臺宿村 同村 地藏堂 同村 藥師堂

取手 同村 念佛堂 小堀村 常圓寺

吉田村 同村 念佛堂 吉田村 地藏堂

同村 嘉納院 小文間村 本泉寺 同村 地藏堂

同村 藥師堂 同村 安養寺 同村 大照寺

同村 成就院 同村 地藏堂 同村 福永寺

取手宿 江なり水戸は行くの官道ふして地名ハ上の山ふ大鹿

氏の岩有りふ因れるさるべし此處の聞人澤近嶺の家ハ新

町ふ在り油屋與兵衛といふその詠歌を伊能頼則が撰ひ載せ

る香取四家集の末ふ清官秀堅がその小傳を擧げりその

文ふ澤近嶺原姓谷澤小字吉次郎又定次郎稱與兵衛號月舎晚

號梧桐庵相馬郡取手驛人年甫二十八村田春海之門與清清水

濱臣等切磋磨礪其作歌雖好新古今集樣能占地歩不流織巧中

畧天保九年戊戌八月二十二日歿年五十所存有雜記二卷梧桐

菴歌集一卷といへり詠歌多うれハ因ふ一首を擧ぐ

護山禪師甲斐國ふ歸りたる馬の餓ふ法華經を贈りてよめる

かひくこの雲のあふふ君すまはとに彩りをもよものを 澤近嶺
因ふいふこの護山禪師ハ甲州惠林寺の隱居ふて長禪寺小住
道徳高き禪師ありはり一時近嶺が世ふ寃鬼ハ無しと言争
ひけるをさらバ見ふ來ませといひはれハ村中の腕立する者
を誘ひ連れて行きて物語りひつゝ禪師の教めもふ本堂ふ

臥しふれりさて戒めたるハ丑時ふ佛前ふ磬の聲聞ゆべし
れどいめ驚きをといひりハ磬の聲せりこの時禪師法衣
を著手ふ線香を持ちて衆人の中ふ近嶺を後ふ從ハしめ墓所
不至り暫讀經一法衣の袖を褰げされハ屈まり居てそこより
窺ひたるふわが知れる家の女髪をバ島田といふ結ひ柳絞
の單衣ふ黒縹子の中に色絹裁入れたる帯して墓の前ふ合掌
し居り見ふ魂消えて吾ハ無し退きて本堂ふ逃歸り
物をと言ハて臥し死るるを百日誦經して成佛ふ歸りそハ繼
母の爲己廿八日ふあれるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰も
せしが己廿八日ふあれるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰も
知りたる事
ありとあむ

この宿の本陣ハ赤野民部の後ふて舊家あり庭ふ水戸景山老

公の歌碑ありげふ御歌の如く利根川の渡船取手渡眼下ふ見

え富士を雲端ふ望こて景色ハハむ方か

きてゆくさきのとりてのやうも思ふ方へとくつきふり 景山老公

床ふ紙貼りて下方ふ籠ふ瀑布の圖かきさる上ふ御筆を添め

るふこの御筆迹ハ裸装
ふて家寶と爲れり
山あめの衣やさす春すきて夏きてふつる白く
景山老公

この家の後ふ一の古道あり佐倉街道といふをハ常陸國筑波郡山王新田ふて蠶養川を渡り山王渡下總國相馬郡山王村ふ入り毛有を經山王道大鹿ふ至て守谷道と合し取手ふ入り此處を過ぎ牛頭天王社側よりオッホリふ出で利根川を渡り中峠村の内ある中峠といふ地ふ到り終ふ佐倉ふ赴くをいふ按中峠の峠を寺田德基が問ひたる高田與清が答へて相模國大住郡の轉圻村といふ有りそハ嶺ある所あり云とて圻の野良道ハ國史を善く讀みたる人ありそ曰く鹿島日記の中峠の説ハ誤ふて中尾落冊子ふ逸ふ四方を見渡せばよたや呼びて吾が村ふ中峠といふ有りといふ打流すといふ今山名ふ呼びて吾が村ふ中峠といふ有りといふ打流すといふ今山隣ある立野村ふ稻荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖をダッヒヨといふありバこの説げふ理あり

本多氏城址 井野村ふ在り本多作左衛門重次の城址あり治房總記天正十八年八月九日領地拜領上總郡ふ小井戸本多今も其作左衛門重次三千石と見えさるハ此の誤あるべし今も其の處を城内といふ鹿島日記云井野村ハ臺宿の東北の方に續

字あれハ舊き城の跡あるべし又花輪臺といふ野あり織部時平が法名を花輪禪定門といひしを思合ハするふ時平が棲所ありはむ計り難し云云下ふ壇輪作りハむ處ハ又ハ武隈の北といへど誤臺宿より西北ふ向て行けば左ふ井野天神社有り猶行けば右の御林中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といふ地有り昌松寺のさて本の路ふ歸りて左ふ普門院の故墟あり城内の東あり後今之處に移るといふされども由緒あるを以て今も年ごとふ米一俵を賜はるとぞ今も普門院ハ此處より北方ふ在りて左方同村昌松寺ふ隣り桑原村光明寺と三處對立す又本多家の香火院ハその上ハ城内あり南ふ堀内との隣村ある青柳の本願寺あり

出づ 地あり路を隔て、右ハ花輪臺あり猶西北ふ行けば山王渡ふ

小堀河岸 井野新田の地ふして岡堰より蠶養川を堰き入れらる流を利根川ふ落す處ふ然いへり鹿島日記ふ出づトハ井野新田ありといへるハ利根川ふ臨こさる地ふして船宿稱呼ふつきて誤りさるあり

三川北

五家皆寺田氏あり德基が家あり今水神を産神とす例祭六月
廿日夜入りて神輿を船ふて利根川よ浮べ流ふ隨て靜おろ下
るこれを御濱船ふハ幕を張り鉾を立て懸く挑燈を掛け笛大
鼓下といふ囃物の聲高擡の内ふ起るこの時後舟より烟火を擧ぐその
數甚多しこれを看る人兩岸ふ雲集し持連ぬる燈ハ月の如
く水中ふ倒映して金波を生じ傍涼風ふ暑を消し酒食の興を
添へて實ふこの地の壯觀あり

第六天山 小文間村ふ在りて松樹茂りさる山あり天明年間神

道徳次郎紫紬泰助あと言へる賊首黨を結びて此處ふ住めり
今も第六天社の西一段低き處ふ竈の迹ありといふ相馬口記
卷三云酒
詰村ふて水戸路を横さまふ經て用水ふ沾ひて下る馬手の方
の見やりある山ハ相馬郡小文間の第六天山といふこふ昔
ハ盗人のあまふ籠り居て往來の人を引剥あどせし
ふ今ハ遍き大御惠ふ因りて然る煩も無しといへり
老るやいろふ小文間山の末の松をさくころむかへるを

御墓松 小文間第六天山の東ふ在りて利根川ふ近この邊す
べて西方

といひその山下を南子ガラ 小文間の城主一色氏の墓標あり
といふ川の向ハ芝原あり 古ハその下ふ五輪塔ありといふ頗大樹あり景色最佳し

一色氏城址 小文間の戸臺ふ近き處ふ在り詰丸と籠しき處ふ

天神社あり下の谷を城内といふ

常總軍記卷十一云一色爲濟まゝりといと悦びて大鹿が館ふ火

をかけ勝鬨あげて酒宴して居りたるふ大鹿が家人か収て

左衛門が遺言として聳の高井十郎ふこの由を告げしハ高

井大ふ驚き又ハ怒て急ふ勢を集めたるふ常々一色ハ我慢押

柄ふして動れば鬪諍を好し者ふれば隣城と睦うらず又大

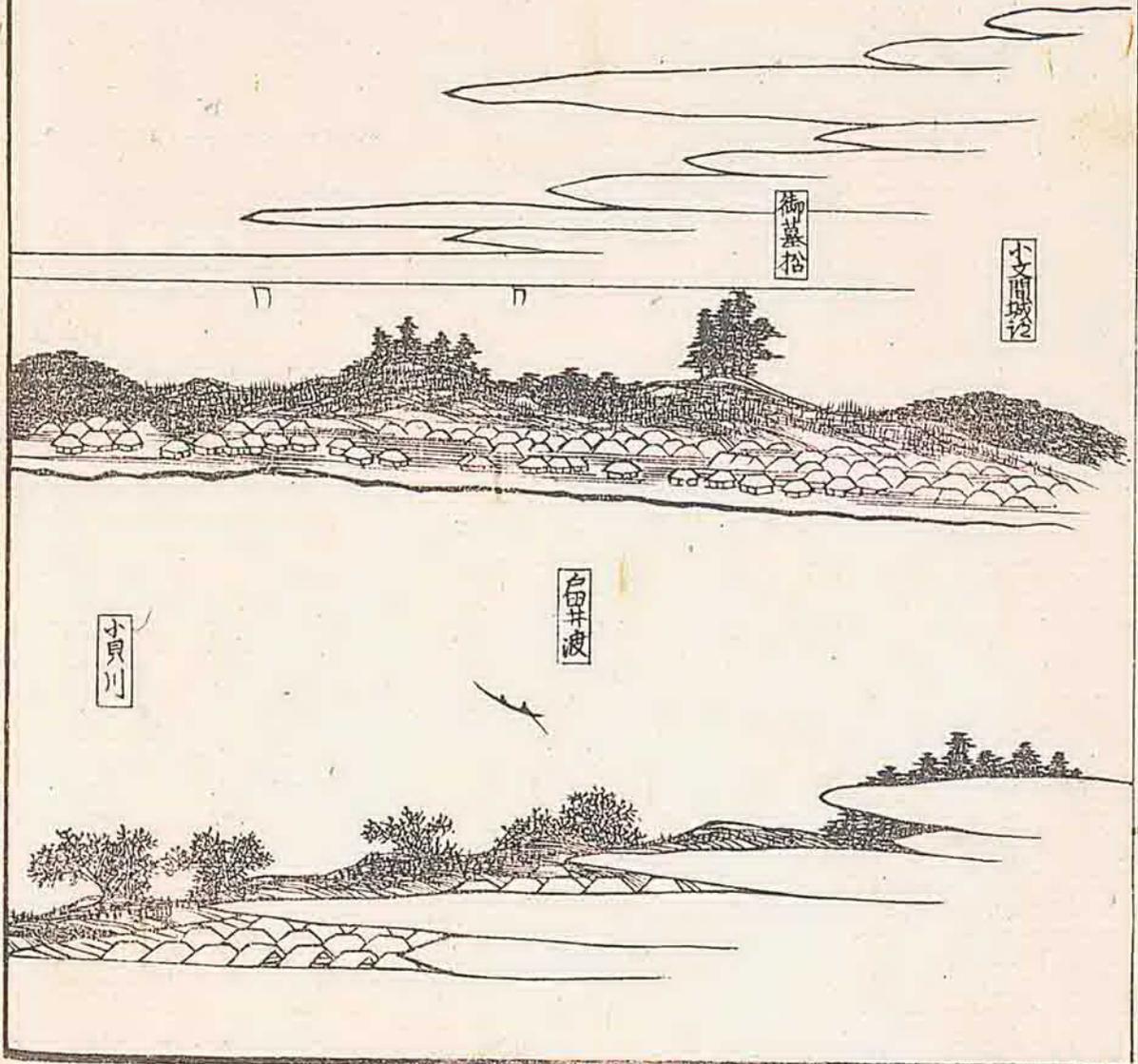
鹿ハ常ふ柔和ふして志平ふり者ふて人これを責びれば

憎き一色が仕業うふ今少早うらむふハ討せまじき物ある

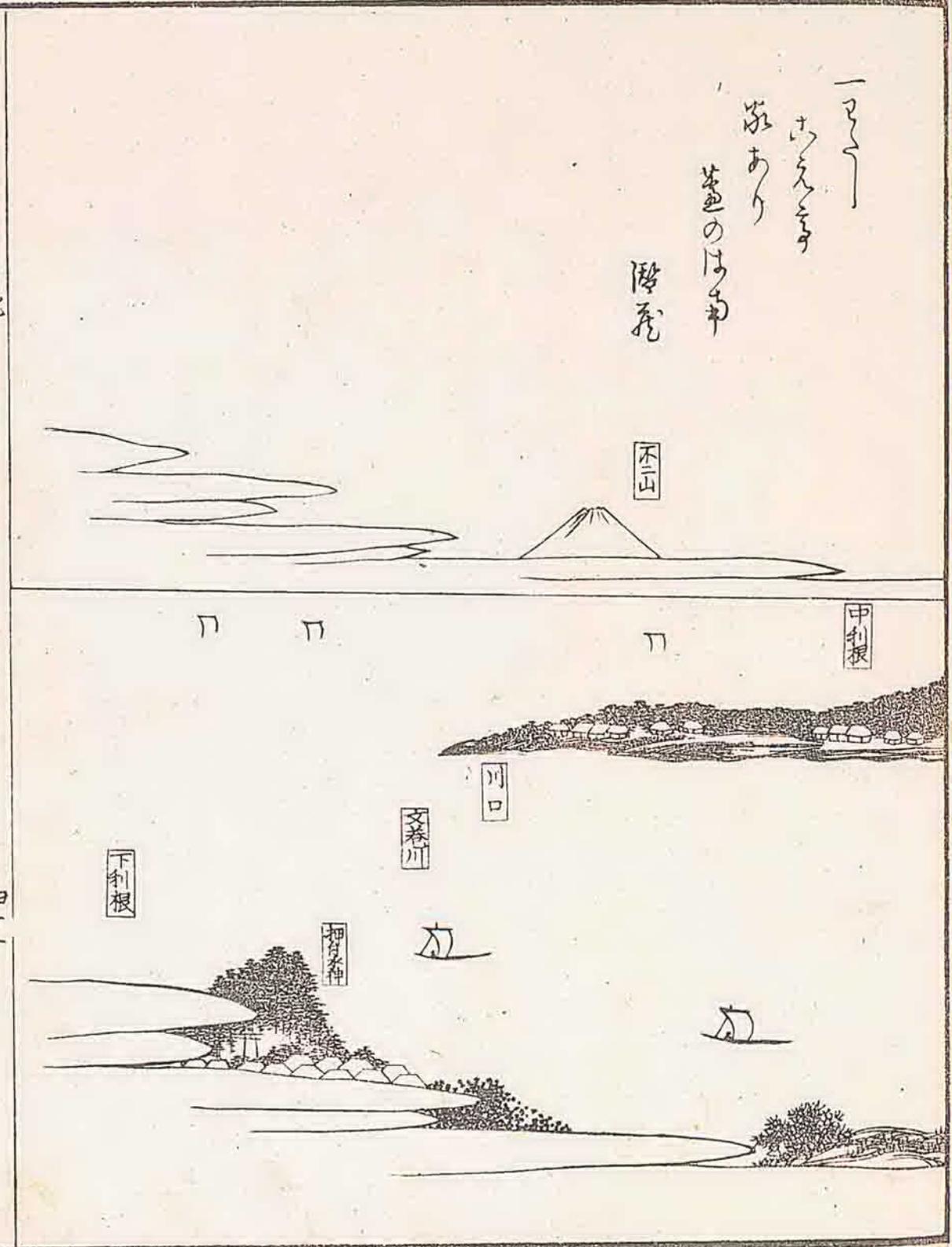
を殘念至極ある次第とて大ふ怒り其よりして我れと集り

江改宿野櫻訪漁
 正消愁赤鯉千條
 網鮮鱸一寸釣月
 五烟柳浦舟繫碧
 蘆洲好景何當比
 菴公赤墜遊
 昇吟孝

引揚々
 魚の光るや
 夏此月
 柳唐



一
 山あり
 遊あり
 遊のほり
 遊尾



來るふ藤代の並河兵庫柵木の柵木左京小更ヒビの小更大膳酒詰
小泉の面々馳來り五百餘人相集まり評議して引違へて小文
間を攻むる事こそ良計リヤウケンありめとて小文間コブンマを攻懸セムリうる一色ハ
大鹿オオカ不在りて小文間コブンマハはぐくき勢セも無ムりしうバ忽高
井トヨノ館タテを乗取ノリトりれ女童ハ泪ナミと共ト井野の普門院フモンイン入イて辛ツき
命イノチをぞ助タりたりと一色ハ大鹿オオカハ取トりしうども己オノが館タテを敵ト
取トりれ色イロを失ウシひ見ミえたる所トコロハ大鹿オオカが味方多勢タセふて攻懸セムリうる
と聞キゆるハ大鹿オオカが館タテハ焼拂ヤクハひしうバ跡アトへと先マへとゆき難ガく
あきれたてし處トコロへ高井タカノ十郎ジュロウ二百餘騎馬烟ウマノケを立て馳來チキるを見
るより今イマハ早叶ハヤウひ難ガしと一色ヒツクが勢セども次第シブ々々ハ落オちしう
バ纒マ六七十人ムツナシとあり逃ニガ行ユクむむしうを高井タカノ十郎ジュロウ追掛オヒケと
て一色ヒツクと見ミしうバ弓ユミと矢ヤつがつて追掛オヒケせ射イりたるその
矢錯ヤサマとずして一色ヒツクが鎧ヤウの綿ワタ噛カふ脊卷セマキせめて立タりしうが高井

固カタより精兵セイヘイあれば一色ヒツク二言ニゴンとも言トモハす馬ウマより落オちし處トコロを高
井タカノ郎ロウ等ト久野キクノ虎次郎コジロウ起オキて立タてず首カビをとる高井タカノハ大鹿オオカをバ討
させしうど當マの敵トクを打取ウチて勝鬨トキキあげ味方ミカタの面々オモへ一礼イチレイして
高井タカノ館タテふぞ歸カりたる由ユあき企キして一色ヒツクハ滅亡メツボウしたるこそ不
覺オシかれ高井タカノハ其ソレより小文間コブンマを普請フシヨウして究竟クワウキョウの要害ヤウキヤクありしう
ハ小文間コブンマふ移ウツりて威イを逞ツヨクくぞしりたる

戸田井渡 小文間の内コブンマノウチある戸田井トノノふて蠶養川トコムガハを渡ワタる處トコロあり筑
波山ツクハ東北トウホクふ見ミえて景色ケシキ最トモよし相馬サイマ日記ニヒキ卷マキ三ミふ戸田井トノノハ小文
間マの内ウチあれば堤ツツミを隔ヘて、子飼コガム川の川邊カハふ住スむ田居ノノかれハ外ト
田居ノノといへるふやといへるハさる事コトあるべし

書シヤ卷マキ川カハ 常陸トコノ國クニより落オつる蠶養川トコムガハの落口オチグチあり
堀ホリ子飼コガム之ノ渡ワタと見ミえ東國トウクニ土人ツチノヒトの説セふ文間庄フマノシラ立タ木キ村ムラふ文間フマノ明アキラ神カミ
戦タケ記キふハ古貝コノ川カハと右ミり
爲ナりすべしこの邊ヘリの地チを
并ナせて文間フマノ八千石ヤチマンイシといへる

が誤れるなりといふ古歌

水葦のかきまかせと云れぬはふまき川といはふるべし

國花萬葉集卷十下總國部云書卷川 名所不出按に名所

物不見古河渡と同一流なり水上あり云 此れハ何處なる天

知り難し猶考ふべし

水神社 戸田井渡の東押付村に在りこの村桃園多し 土人曰く

この村の一里許東に大平村ありそこは住こゆる人を尊びて

御大平様といふ一日此處に來りて魚を釣れるを水神甚怒

りうハイ 潜牛ウハイに乗り來りて釣竿を奪つりさきひむとせしウバ 甚驚ウバきて側を

るヤチ 藤蔓ヤチを投なげ、るウバ 牛の右角ウバに係りウバるを互ウバに牽合ウバひウバる

ふ終ウバに角折れて別ウバれウバりウバとぞされウバばウバこウバの神體ウバハ右角ウバをかき

潜牛ウバに乗りウバるウバ木像ウバあり別當ウバ徳満寺ウバより出ウバづるウバ御影ウバと同一ウバ

今も村人水神の嫌ウバひウバふウバして藤ウバを用ウバるウバずウバ又ウバ大平村ウバの人ウバを嫌ウバ

ふといふその御大平様ウバハ今もその村ウバに祭ウバりて大平ウバ權現ウバと

いふ

